

甲州街道を歩く【上】

(日本橋から黒野田宿)

はじめに

東日本大震災があった平成二十三年の八月、関東地区は東京電力による計画停電の影響の真つ只中でした。ハイキングサークルの世話役会を終えてNさん、Mさんと三人、営業中の店でささやかに懇談の席を囲んでいました。

九月には記念すべき百回記念の例会登山を控えていたので嫌でもその話題で盛り上がりその流れの中でこの企画は始まりまりました。街歩き、街道歩きはテレビ番組でも結構人気になっていました。以前にNさんが踏破した甲州街道歩きの資料を頂いた俣になつていて気になつてもいました。

毎月の例会登山と並行して多摩支部のイベントとして広く参加を募ってみようという事にもなり一気に計画が進むことになりましたが頼りはNさんの経験と知識でした。ひと月も経たない間に届いた計画の骨子と詳細な資料を拝見して意を強くし、反面これは生半可な気持ちではいけないと感じたものです。

最終的に十二名の参加となったスタート時の平均年齢は六十九・八才でした。

ゴールの下諏訪まで全員無事故で歩き切れる事がいちばんの目標です。

平成二十四年六月

竹島久雄

甲州道中の企画について

ハイキングサークルで野山を歩いていましたが、計画を立てるのにいつも難儀していました。

そこで趣向を変えた健康ウォークが無いか、計画が立て易いコースは無いかと考えた末思いついたのが、三〜四年ほど前に女房と歩いた甲州道中（日本橋から下諏訪宿まで）でした。

多摩支部に関係深い街道歩きは、下諏訪宿まで二百十軒余完歩するという目標もあり、皆さんも関心があるのではないかとTさん、Mさんにお話ししましたところ賛同を得ましたので、早速立案にかかりました。

企画をするにあたり、女房と歩いたときに寄れなかった街道近くの名所・旧跡を、自分の勉強のためにも調べて企画書に記載すれば、皆様も事前に楽しんで頂けると思いました。

参考で使用させていただいた文献等は、揺籃社 大高利一郎著「街道を歩く―甲州街道」、山川出版社「新全国歴史散歩シリーズ 東京都・神奈川県、山梨県、長野県の歴史散歩」、岩波文庫「古事記、日本書紀」、教養文庫「日本を知る小辞典4信仰、年中行事」等、ネットでは「パパが歩く甲州道中」ほかです。

これら種々の資料から転載させていただきました。
お礼申しあげます。

街道周辺の神社仏閣、名所旧跡を調べると、歴史、宗教・信仰、

暦と知らないことが多く勉強させられましたが、なんとか案内書らしきものが出来たと思っています。

以前歩いたのは三、四年前のことなので、忘れたことも多く、また大人数を想定して下見をいたしました。所要時間、トイレ、昼食場所の確認、昔歩いて見落とした神社仏閣、旧跡を見たり、間違えて行かなかった街道を辿ったりし、ウオーク当日に間違はなく案内できるようにと下見も忙しいものです。

初めは安易に考えていたのですが、いつの間にか大イベントとなり、それなりに責任も感じていきます。

歩いて面白かったところは、「お岩稲荷神社」、「白糸台幼稚園」、「NEC、日野自動車、コニカミノルタの工場」、「宗格寺の石見土手」等数々ありました。

まだまだ、悩むことも多いとは思いますが二十二回、二年弱掛かるこの旅を全員楽しんで歩けるようこれからもお手伝いさせていただきます。只々、全員が健康で完歩できることを祈るばかりです。

平成二十四年六月

中島征雄

本紙発行の経緯

第一回目ときには既に第四回分ほどの案内書が配布されました。ここで感じたことは写真は撮るし、文章はたまるしこれらを捨ててしまうのはもったいないと、完歩したときには趣味の本を製作しようと考えていました。

それには、生きて完歩することが最大の条件です。

若い人たちには寿会の多摩支部の年寄りとうオーキング、ハイキングと言っていたのだが、考えてみると自分が一番年寄りになっているのにびっくりでした。

その配布資料は各回ともA4数頁に渡り、特に第一回目は江戸地図まで入っていました。

また歩く参考にする地図は「パパが歩く甲州道中」が目標も入り最高の参考書です。

歩いた後は中島さんのGARMINからのGPSデータにより地図にすぐ表示できるようになりました。最新技術を駆使して古い街道歩きが益々、楽しくなっています。

第七回目までのサンプルを作り企画の竹島さんと中島さんに序文をお願いし思い出の記録になればとの遊び心です。

平成二十四年六月

前北勝司

旅人

相原教男

浅見憲一

伊藤泰弘

宇山治男

折本文夫

嶋崎 猛

竹島久雄

中島征雄

中田信義

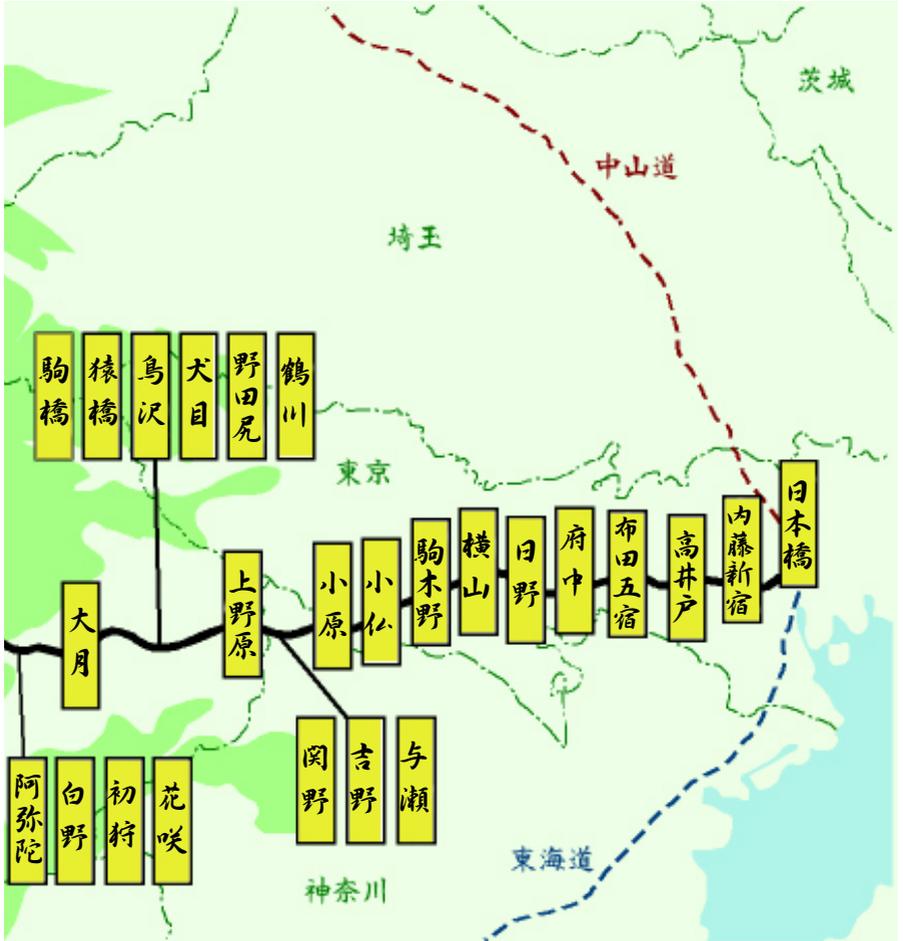
前北勝司

三浦繁雄

八木閱三

甲州道中の宿しゆく

日本橋ニッポン宿しゆく || 内藤新宿 || 下高井
 戸・上高井戸 || 国領・下布田・上
 布田・下石原・上石原 || 府中 ||
 日野 || 横山 (隔月で八日市) ||
 駒木野・小仏 || 小仏峠 || 小原・与瀬
 || 吉野 || 関野 || 上野原 ||
 鶴川 || 野田尻 || 犬目 || 下鳥
 沢・上鳥沢 || 猿橋 || 駒橋 || 大
 月 || 下花咲・上花咲 || 下初狩・
 中初狩 || 白野・阿弥陀海道・黒野
 田 || 笹子峠 || 駒飼・鶴瀬 || 勝
 沼 || 栗原 || 石和 || 甲府柳町
 || 葦崎 || 台ヶ原 || 教来石 ||
 葛木 || 金沢 || 上諏訪 || 下
 諏訪 (中山道下諏訪宿)



目次

| | |
|---|-----|
| 甲州道中の用語解説 | 1 |
| 第一回 日本橋く内藤新宿(笹塚駅) 平成二十三年十一月二十日(日) | 2 |
| 第二回 内藤新宿(笹塚駅)く高井戸宿(つつじヶ丘駅) 平成二十三年十二月十五日(木) | 10 |
| 第三回 高井戸宿(つつじヶ丘駅)く府中宿(分倍河原駅) 平成二十四年一月十九日(木) | 15 |
| 第四回 府中宿(分倍河原駅)く日野宿(日野駅) 平成二十四年二月十六日(木) | 24 |
| 第五回 日野宿(日野駅)く八王子宿(高尾駅) 平成二十四年三月十五日(木) | 35 |
| 第六回 八王子宿(高尾駅)く与瀬宿(相模湖駅) 平成二十四年四月十九日(木) | 53 |
| 第七回 与瀬宿(相模湖駅)く上野原宿(本町三丁目バス停) 平成二十四年五月十七日(木) | 62 |
| 第八回 上野原宿(本町三丁目バス停)く犬目宿(下宿バス停) 平成二十四年六月二十一日(木) | 74 |
| 第九回 犬目宿(下宿バス停)く猿橋宿(猿橋駅) 平成二十四年七月十九日(木) | 85 |
| 第十回 猿橋宿(猿橋駅)く下初狩宿(初狩駅) 平成二十四年八月十七日(金) | 96 |
| 第十一回 下初狩宿(初狩駅)く黒野田宿(新田下バス停) 平成二十四年九月二十日(木) | 106 |
| 付録 犬目の兵助のこと | 118 |

【用語解説】

本陣 江戸時代の宿場で、大名などが宿泊した公認の宿舎。

脇本陣 大名の従者が多く、本陣が対応しきれなくなつたとき、予備にあてる宿舎。

問屋場 人馬の継立などの事務を行ったところ。

継立 宿場で人馬を乗り継ぐこと。

高札 法度などを記し、人目をひく所に高く掲げた板札。

講札講 (神や仏に参拝に行く団体) が指定した旅館に掲げてある看板。

枅形 鍵の手。敵の侵入を阻むため、真つ直ぐに進めないよう意図的に道を折り曲げたもの。

間宿 正規の宿駅間に設けられた旅人休憩用の宿。

立場 人足・旅人の休憩場所。

見附 枅形のある城門の外方に面する部分。

一里塚 街道の両側に一里毎に土を盛り、里程の目標とした塚。

行在所 天皇行幸の際の仮のすまい。

宝篋印塔 宝篋印陀羅尼を納める塔。後に供養塔・墓碑塔として立てられた。

廻国塔 日本全国の主要な神社仏閣を巡り、法華経を納める行を行った人たちが記念に立てた石塔。

二十三夜塔 陰暦二十三日の夜に月待ちをする行事の際、供養のしるしとして立てた石碑。

常夜灯 街道沿いに設置され、夜通し灯されている明かり。

道祖神 集落の入り口などに多く、道路の悪霊を防いで行人を守護する神。

出桁造り 桁を表に通し、軒を支える横梁を渡した造り。

(揺籃社 大高利一郎著「街道を歩く 甲州街道」より)

第一回 実施日 平成二十三年(2011)十一月二十日(日)
日本橋～京王線笹塚駅 約一〇・一軒 宿 内藤新宿

★集合場所・時間 三越本店正面入口 午前九時

【第一回甲州道中行程】

日本橋(日本国道路路原標)～一石橋(平将門の首塚)～
東京銀行協会ビル～和田倉門～馬場先門～第一生命本社ビル
(GHQ本部)～日比谷見附跡～桜田門～井伊直弼屋敷跡(憲政
記念館・日本水準原点標庫)～渡辺崋山生誕地跡～半蔵門～四
谷見附跡(田宮稲荷)～(消防博物館)～お岩水かけ観音由
来の碑～四谷大木戸跡碑～玉川上水記念碑～内藤新宿～太宗寺
～(成覚寺)～追分(道標)～天龍寺～箒銀杏～正春寺～(荘
厳寺)～旗洗池跡碑～子育て地藏～牛窪地藏～笹塚駅。

◎日本橋

慶長八年(1603)に初めて架橋。当時の橋は長さ二十七間
四尺五寸、幅四間三尺五寸、橋脚八本。欄干には擬宝珠が施さ
れ、反りのある木橋。翌、慶長九年(1604)二月にこの橋を
起点に五街道(東海道、中山道、甲州道中、日光道中、奥州道
中)が整備され、一里塚が築かれた。現在の橋は十九代目(明
治四十四年四月に架けられた。橋名標は十五代将軍徳川慶喜の



筆。橋の中央には「日本国道路元標」
のプレートが埋め込まれていて、レプ

リカが橋の北詰に置かれている。かつて橋の南詰には高札があ
り、向かい側は大罪人が晒さらされた晒し場でした。橋の北詰から
江戸橋の間は魚河岸であった。

◎一石橋

この橋の名は、橋の北に金座改役後藤庄
三郎宅、南には幕府御用達の呉服商後藤縫
之助の店があり、後藤(五斗)と後藤(五斗)
を足すと一石になったことから江戸っ子の
洒落で「一石橋」と名付けられた?。この
橋の南詰西側に迷子石といわれる「迷子の
しるべ石標」があり、正面に「満与ひ子の
志るべ」、左に「たつめる方」、右に「志ら



する方」、裏側に「安政丁巳年（1857）二月 西河岸」と刻まれている。迷子をさがす者と保護した方との掲示板。

※東京駅八重洲口のあたりはかつて北町奉行所のあったところ。

◎平将門の首塚

朱雀天皇の時代に将門は天慶二年（939）坂東で反乱（坂東の地で独立政権を打ち立てる戦いであった）を起したが、天慶三年（940）の戦いで討ち死、首は平安京に運ばれ晒し首となるが首は坂東（関東）を直指して高く飛び去り、途中力尽きて落ちた場所。平将門は神田明神の御祭神の一つである。（大己貴命、オホナムケノミコト、スサノヒコノミコト、少彦名命）



◎東京銀行協会ビル

旧東京銀行集会所 改築前の建物は松井貴太郎（横浜工務所）による設計で、大正五年（1916）に竣工した煉瓦造り二階建てで、渋沢栄一によって創設された東京銀行協会のための集会所として利用されました。平成五年（1993）、外壁二面のみを残



し、高層建築に改装された。

◎和田倉門

和田倉橋を渡ると和田倉門があり、

枡形になつている。説明板によると、「家

康江戸入

りの時、一の蔵として土衆通行のために橋を架け、門を設けて蔵の御門と称した。」これが後の和田倉門。幕末には門内に会津藩主松平肥後守容保（かたむね）の上屋敷があった。



◎馬場先門

江戸城三十六見附に一つ。馬場先門の名前は三代將軍家光が、寛永十二年（1635）に朝鮮人の曲馬を門内の馬場で見たことから朝鮮馬場と呼ばれ、それがいつしか馬場先と呼ばれるように

なったためと云われている。その後、門は閉じたままで土分の通行も許さなかったため、不開門あかぎのしんと呼ばれていました。門は、その後のたびたびの大火で焼失、再建を繰り返し、明治になって撤去されました。

◎第一生命本社ビル

当ビルは終戦後「連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)」が置かれた。注) GHQ the General Headquarters 総司令部六階にあったマッカーサー元帥の最高司令官室は現在も保存されている。



◎桜田門（外桜田門）

このあたり一帯は「桜田郷」と言われていた。当初は、小田原街道の始点として小田原口と呼ばれていた。

寛永十三年(1636)にそれまでの柵戸仕立ての門を枡形門に改築、桜田門というようになった。外側の「高麗門こうらいもん」と内側の「渡櫓門わたりのりやうもん」の二重構造になっている。この二門の間に枡形と呼ばれる広場がある。「桜田門外の変」は安政七年・万延元年(1860)



三月三日、現在の警視庁前で大老井伊直弼が水戸、薩摩の浪士十八名に襲撃され暗殺された。享年四十六歳。墓は井伊家の菩提寺、世田谷区の豪徳寺。

◎井伊直弼屋敷跡

この場所は改易になるまで熊本加藤家の上屋敷があった。寛永九年(1632)に加藤清正の子忠弘

が庄内に配流され加藤家断絶になるまで) 明治以後は陸軍参謀本部や陸地測量部が置かれていた。現在には憲政記念館や日本水準原点標庫がある。標庫は水準原点を保護するため明治二十四年(1891)に建設された。日本水準原点は高低測量の原点で標高は東京湾平均海面で二十四・四一四〇米。



第一回参加者
中田、相原、折本、八木、伊藤、中島
三浦、前北、宇山、竹島、(嶋崎)

◎渡辺崋山生誕地跡

三宅坂を渡ったところにある。渡辺崋山は蘭学者、画家で、寛政五年（1793）、三宅備前守藩邸内で生まれ、大部分をここで過ごし、三河田原藩の江戸年寄役を勤めていたが、天保十年（1839）蛮社の獄で処罰され、のち自刃した。

（注）蛮社の獄 幕府が蘭学者にくわえた弾圧事件。（高野長英、渡辺崋山） 蛮社とは、南蛮（西洋）の学術や国際知識を学習するサークルで、崋山はそのサークル尚齒会しやうしの座長格をつとめていた。

◎半蔵門

江戸城の西端で大手門とは正反対の位置にあり甲州街道（道中）に通じている。半蔵門の名称は、この門を警護を担当した服部正成、正就親子の通称「半蔵」に由来する。服部家の部下（与力三十騎、伊賀同心二百名）がこの門外に組屋敷を構え、四谷へと通じる甲州街道沿い一帯が旗本屋敷で固められたことに由来する。これは、非常時に將軍を甲州街道から幕府の天領である甲府へと安全に避難



させるためと云われている。だから、この門は搦め手門である。

◎四谷見附跡

江戸城 三十六見附の一つ見附とは、『枅形のある、堀に面した城門。』見つけるから「見張る」なり、不審者が侵入しないように見張る場所、即ち監視所を「見附」と呼ぶようになったようだ。また、三十六ヶ所あったかど

うかは、はつきりしない。

（一）、浅草橋門、二、筋違橋門、三、小石川門、四、牛込見附、五、市ヶ谷見附、六、四谷見附、七、食違橋門、八、赤坂見附、九、虎ノ門、十、幸橋門、十一、山下橋門、十二、数寄屋橋門、十三、鍛冶橋門、十四、呉服橋門、十五、常盤橋門、十六、神田橋門、十七、一ツ橋門、十八、雉子橋門、十九、竹橋門、二十、清水門、二十一、田安門、二十二、半蔵門、二十三、外桜田門、二十四、日比谷門、二十五、馬場先門、二十六、和田倉門、二十七、大手門、二十八、平川門、



嶋崎さんが合流、四谷見附公園で昼食

二十九、北桔梗門、三十、西の丸大手門、三十一、西の丸玄関門（二重橋）、三十二、坂下門、三十三、内桜田門（桔梗門）、三十四、下乗門、三十五、中の御門、三十六、中雀門を三十六見附としている。）

四谷見附橋は明治四十二年（1909）に完成した「赤坂離宮」（現・迎賓館）に至る道路として、麴町の大通りをまっすぐに繋ぐ橋を、大正二年（1913）に今の位置に完成。その後、交通量の増加などに伴う拡幅工事で架け替えられ、現在の橋は平成三年（1991）に完成した。なお、大正二年に架設された「旧四谷見附橋」は平成五年（1996）、八王子の多摩ニュータウン長池公園をまたぐ「長池見附橋」として移設された。「四谷御門」と四谷側を結んでいた「土橋」は、今の四谷見附橋の三十米ほど北側（市ヶ谷寄り）にあり、「四谷見附新橋」と呼ばれているが実際にはこの新橋のほうが、四谷見附の見附橋の位置としては正しい。

◎田宮稲荷

境内にある説明板には次のように記されている。「都旧跡田宮稲荷神社跡 所在 新宿区左門町十七番地 指定 昭和六年十二月二日 文化文政期に江戸文化は爛熟期に達し、いわゆる化政時代を出現させた。歌舞伎は民衆娯楽の中心になった。「東海道四谷怪談」の作者として有名な四代目鶴屋南北（金井三笑の門人で幼名源藏、のち伊之助、文政十二年（1829）十一月二十七日没）も化政時代の著名人である。



年三月一日 建設 「東京都教育委員会」

「東海道四谷怪談」の主人公田宮伊左衛門（南北の芝居では民谷伊右衛門）の妻お岩を祀ったお岩稲荷神社の旧地である。物語は文政十年（1827）十月名主茂八郎が町の伝説を集録して、町奉行に提出した「文政町方書上」にある伝説を脚色したものである。明治五年ごろ、お岩神社を田宮稲荷と改称し、火災で一時移転したが、昭和二十七年再びここに移転したものである。昭和四十三

◎四谷大木戸跡碑

四谷大木戸は、甲州街道出入り口の関門として、元和二年（1616）に設けられた。地面には石畳、両側には石垣を築き、高札場もあったが、寛政十四年（1792）に廃止。大木戸から内藤新宿までの石畳は、明治初年まで残ってい



たという。この石碑は、昭和三十四年、地下鉄丸ノ内線工事のときに発見された玉川上水の石樋が使われている。

◎玉川上水記念碑



流していた。

◎内藤新宿

内藤新宿は元禄十一年（1698）に開設された。甲州街道一番目の宿場は高井戸であったが、日本橋から高井戸までは四里二町（約十六軒）と遠かった。そのため元浅草の町年寄高松喜六ら五人が冥加金五千六百両を上納し、新しい宿場の開設を許可された。四谷大木戸（四谷四丁目交差点）から追分（新宿三丁

）までは、明治二十八年に建てられ、

玉川上水が引かれた理由と玉川庄右衛門・清右衛門兄弟の苦心が記されている。ここには水番所が置かれていた。玉川上水はこの水番所まで羽村取水堰から約四十三軒すべて開渠で引かれ、ここからは石樋・木樋を地中に埋め、江戸城内、番町、平河町、虎ノ門方面に

目交差点）までの一帯約一軒の信濃高遠藩内藤家下屋敷の甲州街道沿いの一部が用地として割かれ、このため内藤新宿と呼ばれた。享保三年（1718）、八代將軍吉宗が風紀紊乱の廉でいったん廃止したが五十四年後の明和九年（1772）、老中田沼意次が、百五十両の冥加金を年々上納する条件で再開した。宿場の慣例で飯盛り女が認められ、新宿遊郭（岡場所）を形成、「堀之内祖師参り」の帰り客などで品川宿よりも賑わった。

注）「堀之内祖師参り」は、杉並区堀之内三丁目四十八日蓮宗日円山妙法寺の祖師堂内の木造「厄除け祖師」を参ること。妙法寺には「波の伊八」の彫刻がある。

◎太宗寺

太宗寺は高遠藩内藤家の菩提寺です。境内にある露座の銅造の地藏菩薩坐像は、もとは甲州街道に面して置かれていた「江戸六地藏」のひとつ。



注）江戸六地藏 深川の地藏坊正元が、十八世紀初めに街道沿いの江戸の入口に旅の安全を祈って六体の銅造地藏像を、京都の六地藏にならって安置したもの。一番

品川品川寺（東海道・現品川区）、

二番 四谷太宗寺（甲州道中・新宿区）、三番 巢鴨真性寺（中
山道・豊島区）、四番 山谷東禅寺（奥州街道・台東区）、五番
深川靈巖寺（千葉街道・江東区）、六番 深川永代寺（千葉街道・
江東区）。いずれも像の大きさは二・七米前後。なお、六番の永
代寺は富岡八幡宮にあったが、明治初年に破壊され存在しない。

閻魔堂には、「内藤新宿のお閻魔さん」「しょうづかのばあさ
ん」として親しまれた閻魔大王と奪衣婆の像がある。閻魔像は
江戸三大閻魔の一つで都内最大五・五米。奪衣婆は、閻魔大王に
仕え、三途の川を渡る亡者から衣服をはぎとり罪の軽量を計る
とされ、この像も右手に亡者からはぎ取った衣が握られている。
また、衣をはぐところから、内藤新宿の妓楼の商売の神様とし
て信仰されていた。

◎成覚寺

成覚寺は、俗称「投げ込み寺」。
開山は浄蓮社友上人瑞翁直心和尚。文禄三年（1594）に起立。遊
女合葬碑、浮世絵師・狂歌師・戯
作者であった恋川春町の墓があ
る。

遊女合葬碑は区指定有形文化



財、壁面に「子供合埋碑」、台石に「旅
籠屋中」とる。万延元年（1860）立。
遊女（旅籠の飯盛り女）たちは宿
主から「子供」と呼ばれていた。

◎追分

新宿三丁目の交差点が追分で、甲
州道中と青梅街道の分岐点。

江戸時代、青梅付近から産出する
石灰は建築材料として江戸に運ばれ
ていた。その街道を青梅道、甲州裏街道などと呼ばれていた。

◎天龍寺

この寺の梵鐘は江戸にあった九つの「時の鐘」の一つで、上
野寛永寺・市ヶ谷の東円寺（亀岡
八幡宮かも）の鐘とともに江戸三
名鐘の一つ。内藤新宿はお城に遠
いので登城の武士が遅れないよう
に時刻よりも三十分ほど早めに撞
いたという。そのため、遊女との
別れも早められ、「追い出しの鐘」





ともいわれた。寺には、笠

間城主牧野備後守成貞より寄進されたオランダ製の櫓時計があり、この時計をもとに鐘が撞かれたという。



◎ 箒銀杏

天神社にある箒を逆さにしたような形の樹齢三百年ほどの銀杏。かつて近くには玉川上水が流れていて、それに架かる橋は天神橋と呼ばれていた。



◎ 正春寺

老中土井利勝の弟、土井昌勝の妻は徳川二代将軍秀忠の乳母となり、はつだいのつねね初台局と称した。その功により天正十九年(1591)、武州豊島郡代々木村に二百石の知行地を賜った。よって「初台」の地名が残って



いる。

初台局の娘も梅園局と称し、三代将軍家光の乳母となった。母の死後、法名を「正春院釋尼清安」としてこの寺の開基となった。

◎ 旗洗池跡碑



後三年の役(1083～87)からの帰途、源八幡太郎義家がここにあった池で旗を洗ったという伝説があり、これが「幡ヶ谷」の地名の由来となった。「旗洗池跡碑」は東郷平八郎元帥の筆。

◎ 子育て蔵

こぶちぐら貞亨三年(1686)建立。一見ビルのお店のようなお堂内の中には元禄・正徳時代の庚申塔がある。



◎牛窪地蔵

このあたりは湿地帯（窪地）で、雨乞いの場所であった。ここには刑場があり、極悪人が牛裂きの刑に処せられたので「牛窪」の名が付いたという。牛窪地蔵は、悪疫が流行したので子供らの安泰を祈願し、正徳元年（1711）に建立された。

文化三年（1806）に建てられた「道供養塔」や「庚申塔」がある。

「道供養塔」は、道路自体を供養して報恩感謝を捧げ、交通安全を祈る全国でも珍しいものである。



本願寺和田堀廟所（栖霞院、覚蔵寺、宗源寺）～高井戸一里塚跡～長泉寺～大橋場跡～新一里塚～給田観音堂～仙川一里塚碑～仙川駅

◎笹塚

街道の両側に笹が茂った塚があったことに由来。その塚は、慶長九年（1604）に一里塚総奉行も兼務していた大久保長安によって設置された一里塚という説もある。



◎代田橋跡

かつてここを玉川上水が斜めに貫き、長さ五間、幅三間余の石橋が架けられていたが、土で覆われていたのでその形はよくわからなかったらしい。「江戸名所図会」にも掲出され名所であった。



第二回 実施日 平成二十三年（2011）十二月十五日（木）

笹塚駅～つつじヶ丘駅 約九軒 累計約二十軒

宿 下高井戸宿、上高井戸宿

★集合場所・時間 京王線笹塚駅改札前 午前十時

【第二回甲州道中行程】

笹塚（一里塚？）～代田橋跡（玉川上水）～塩硝蔵跡～築地



◎塩硝蔵地跡

現在明治大学和泉校舎と築地本願寺別院和田堀廟所のある広大な敷地（約二万坪）には、かつて幕府の塩硝蔵（弾薬等の貯蔵庫）が置かれていた。明治維新のときにはその弾薬が上野彰義隊や奥州諸藩の鎮圧に威力を発揮した。その後は陸軍の火薬庫となっていた。



には、古賀政男、服部良一、樋口一葉、海音寺潮五郎、中村汀女、水谷八重子の墓がある。

◎高井戸宿

甲州街道の宿駅では人足二十五人・伝馬二十五頭を置くことが定められていたが、大名や公用旅行者のための人馬継立は無償であったので、かなり財政を圧迫していた。

◎築地本願寺和田堀廟所

築地本願寺は大正十二年（1923）九月一日の関東大震災で全焼したため、境内にあった多数の墓地を移転する必要にせまられ、当時豊多摩郡和田堀の大蔵省管轄の陸軍省火薬庫跡地約一万二千坪の払い下げを受け、昭和九年（1934）の冬には、築地本願寺の仮本堂を移築し、ここに和田堀廟所が建立された。この廟所



そこで負担を軽くするために、月のうち前半十五日が下高井戸宿、後半十五日が上高井戸宿で受け持ち、上下で一宿としていた。下高井戸宿本陣は富士屋。

◇玉川上水路を埋め立てて緑道にした公園で昼食をとる。



◎高井戸一里塚

日本橋から四番目の一里塚。五間四方の塚の上には榎が植えられていたという。



◎長泉寺

創建は慶安元年（1648）。境内には享保十三年（1728）に建てられた観音堂があり、堂内には区指定文化財「板絵着色西国巡礼図」二枚一対がある。また、「徳本上人の名号碑」や上高井戸宿で武蔵屋という本陣をつとめた

並木氏の墓もある。



◎大橋場跡

大橋場の由来はわかりませんが、擬宝珠を象った橋の欄干の親柱があり、「武州烏山村 大橋場の跡」と刻まれているので、橋があったことは間違いなさそうだ。

◎給田観音堂

創設の由来は不明。「新編武蔵風土記稿」には、「本観音堂創設ノ由来ハ未詳ナリ。

尼ノ庵ナラント思考ス。右去ル高貴ノ息女（註 徳川家二縁アル者、或は紀州ナリトモ伝フ）ニナリ、庵ニ居住セラレタル旨伝フ。」とあり、徳川関係の尼寺であったことが推定される。本堂脇にある「宝篋印陀羅尼経之塔」はかつて甲州街道沿いにあつて、徳川関係者は必ず下馬しなければならなかったという。





注「新編武蔵風土記稿」は文化・文政期に昌平坂学問所地理局によって編纂された武蔵国の地誌。文化七年（1810）起稿。天保元年（1830）完成。全二百六十六巻。

◎新一里塚

給田三丁目二十九番一号の池亀家門前脇に建っている。

新一里塚とは、明治三年（1870）に内藤新宿から一里ごとに定められた一里塚。昭和五十九年に現在の地に再建された。



◎仙川一里塚

日本橋から五里目の一里塚。仙川駅前の人通りの多い交差点に碑がある。



◎滝坂

滝坂の入口の石柱には「馬宿川口屋」、「滝坂旧道」とあり、川口屋は戦前まで馬方や行商人を相手にした旅籠を営んでいた。



滝坂は名の通り、滝のように急



な坂で街道の難所の一つで、途中に薬師如来がある。



◎金子の大銀杏

この辺り金子村と言われている。稲荷神社前の一对の銀杏は調布市の天然記念物で説明看板によると、目通り四・〇九米と一・九七米で太い方が雄木、細い方の雌木が実をつける。樹齢約二百五十年と推定される。



◎鬼の庚申塔

青面金剛の寛政十二年（1800）の庚申塔



金子の大銀杏前で第二回参加者
折本、伊藤、中島、中田、嶋崎
三浦、浅見、宇山、(前北)

第三回 実施日 平成二十四年(2012) 一月十九日(木)
つじヶ丘駅～分倍河原駅 約一〇・五軒 累計約三十一・二軒
宿 布田五宿(国領宿・下布田宿・上布田宿・下石原宿・上石原宿)、府中宿
★集合場所・時間 京王線つじヶ丘駅・改札口 午前九時

【第三回甲州道中行程】

つじヶ丘駅～赤い金龍寺～妙円地藏～野川馬橋～圓福寺六地藏～常性寺・小橋の馬頭観音～(布田天神社)～小島一里塚跡～金剛山源正寺～上石原宿名主中村家～西光寺・常夜灯～瑠璃光寺薬師堂・行人塚～染屋不動尊～常久一里塚跡～八幡宿石碑～国府八幡宮～府中宿～大國魂神社～問屋場跡～高札場～御旅所～下河原緑道(国鉄下河原線跡)～(坪の宮)～高安寺・弁慶硯の井戸～分倍河原駅

◎赤い金龍寺

天保六年(1835)の過去帳には開基は米西禅師で創建は建永元年(1206)とあり、もとは臨濟宗であった。境内の池水は、源義経が陸奥に落ちるときに立ち寄り、弁慶が大般若経の書写に



用いたという伝説がある。また、当寺の十王堂には頼朝祈願の石造十王像と江戸後期の木造十王像が安置されている。のちに徳川家光から御朱印十三石四斗が寄進された。

◎妙円地藏

妙円尼は俗名を熊といい、武蔵国多摩郡酒井(境)村の六右衛門の長女として生まれ、若くして金子村(現・調布市西つじヶ丘・菊野台あたり)の新助に嫁いだが、恵まれない境遇のうえに失明する。これを機に悟った彼女は深大寺より「寿量妙円」という法号をもらって尼となり、以後村人のために路傍で鉦をたたいて念仏を唱え、集まった浄財で文化二年(1805)にこの地藏菩薩像を作った。それからは甲州街道のこの地藏の傍らで念仏三昧の日々を送った。自らは念仏往生を願い、文化十四年(1817)十月二十九日に村人が見守る中没したという。

それ以来この地藏を「妙円地藏」と呼ぶようになった。失明後、妙円のたどった運命を滝沢馬琴が「玄同方言」で詳しく紹介したことによって、妙円地藏は一躍江戸近在で有名になった。



妙田尼の墓は深大寺の三昧堂にあり、鉦は調布市郷土博物館に保存されている。手前そばに享保十二年(1727)の庚申塔がある。

◎野川・馬橋

野川に架かる橋を「馬橋」といい、ここから布田五宿の一つ国領宿になる。このあたりの川沿いは、かつて馬橋原と呼ばれた低地で、野川を利用した用水堀などがあり、街道には三本の橋が架かっていたという。馬橋を渡った街道の北側には馬捨場

があり、「馬頭観音」が立っていたが、現在は、布田駅の北側の常性寺にある「小橋馬頭観音塔」に移設されている。



注) 布田五宿 国領、下布田、上布田、下石原、上石原の五宿を称して「布田五宿」という。本陣、脇本陣はない。「布田五宿」は一月を六日毎に交代する当番制で、両隣の高井戸宿・府中宿へ宿継ぎ業務を行っていた。

◎圓福寺・六地藏

本誓山と号し、創建年代は不詳。北条泰



地へ移転したという。

◎常性寺・小橋馬頭観音塔

創建は鎌倉時代といわれ、もとは多摩川沿いにあったが、慶長年間(1596～1615)に甲州街道沿いの現在地に移設された。正面の本堂には薬師如来坐像が、左手の不動堂には成田山厄除け不動尊が、右手の地藏堂には一

時の舎弟開壽丸が開山となり鎌倉の切通しに創建、武田信玄(法性院機山居士)が中興したと伝えられる。鎌倉より多摩川沿いに移転の後、中興二

代胎玄の時に寛永元年(1624)当



願地藏尊が安置されている。一般には、調布不動尊常性寺として知られており、江戸時代に上総国成田山新勝寺より成田不動尊を勧請したのが始まりである。

本堂前の「馬頭観音塔」は文政七年（1824）の建立。もとは、馬橋の「馬捨場」（馬の埋葬地）にあったがここに移された。これは布田をはじめ、八王子、長沼、矢の口、菅などの馬持ち衆によって建立され、碑文には「八王子縞買中」と記されていることから、その頃の呉服商がこの辺りを馬を引いて調布特産の「縞木綿」を買い歩いたと推測できる。

◎布田天神社

「延喜式神名帳」に載る式内多摩八座の一つ。もとは多摩川近く（古天神公園付近）にあったが、文明九年（1477）に洪水を避けて現在地に移った。祭神は少彦名命で移転のときに菅原道真が合祀された。神社には豊臣秀吉が小田原の後北条氏攻略の際、治安維持と民衆安堵のために郷中に下した禁札（太閤の制札）が残されている。



◎小島一里塚

日本橋から六里目の一里塚。ここは江戸時代の初めごろ、甲州街道に築かれた一里塚のあったところである。



江戸日本橋を起点として、およそ六里（二四軒）の距離にある。一里塚は街道の一里ごとに、その目じるしとして道の両側に築かれたものである。たいていは塚の上にエノキが植えられ、遠くからでも望見できるようにして旅行者の便がはかられた。ここにも樹齢二〇〇年余りと推定されるエノキの大樹があつて、その昔がしのばれたが、危険防止のため昭和四〇年頃に伐られた。調布市教育委員会と記されている。

◎上石原宿 名主中村家

調布市観光協会の説明看板によると、『近藤勇と新撰組ゆかりの地・上石原宿名主中村家近藤勇が甲陽鎮撫隊を率い甲府城を目指す途中、故郷上石原宿の名主中村勘六宅に立ち寄って歓待を受けたと言われる。中村家は



代々村役人をつとめた家柄であり勘六の子克昌は自由民権運動のリーダーとしても活躍し、明治二十七年に衆議院議員となり、帝国電気鉄道取締役、調布銀行の取締役を歴任した。また彼は詩文書画にすぐれていた。若宮八幡宮内の凱旋碑、近藤勇の孫久太郎の名が刻まれている布田天神社内の日露戦争忠魂碑などは克昌の書である。

近藤勇と甲陽鎮撫隊

『鳥羽伏見の戦いに敗れた幕府軍とともに、大阪より海路江戸に戻った近藤、土方に慶応四年（1868）二月、天領甲州の鎮撫（甲州防衛）の命が勝海舟を通じて下った。

新撰組は新たに兵を募集し、甲陽鎮撫隊として甲州街道を通過して甲府城へ向かった。上石原を通過する際、故郷の人々に歓待を受けたといわれている。三月五日、甲州駒飼宿に到着したとき、既に板垣退助率いる官軍は甲府城に入城しており、翌六日勝沼の柏尾で因幡、土佐藩兵らからなる官軍と戦ったが、圧倒的な戦力に敗れた。『調布市観光協会』

◎西光寺・常夜灯

西光寺は応永年間（1394～1428）の創建といわれる古刹で、徳川家光から十四石二斗を受けた御朱印寺であった。市・重宝



の本尊・大日如来像をはじめ、江戸時代の最高級の彫技といわれる「観音三十三応現身像」などが安置されている。明治十二年の大火で、弘化四年（1847）造立の山門、享保年間（1716～35）造立の仁王門などを除いて焼失した。山門手前には、甲陽鎮撫隊ゆかりの地であるため「近藤勇像」が設置されている。（四万六千日観音会）

常夜灯 近藤勇像の横の常夜灯18
は弘化三年（1864）の建立。『秋

葉大権現』、「榛名大権現」、「鎮守両社宮」、台座には「宿内安全」など刻まれている。調布市内で最大で、元は道の反対側にあった。門前には嘉永五年（1852）に建てられた「堅牢地神塔」がある。地天を祀ったもので農民が農作の祈願を目的としたもの。



◎瑠璃光寺薬師堂・行人塚

薬師堂の石造り瑠璃光薬師如来像は、貞享三年（1686）に元仙台藩医師の松前意仙が造った像。松前意仙は仏門に帰依して



諸国を巡歴、この地に居を定めてからは終日読経し、ときどき行脚托鉢に出たという。この間に薬師如来を彫り上げ大願成就後、深さ二・五米の墓穴を自ら掘り、「鉦の音が消えたら土をかけてくれ」と言い、鉦を持って中に入った。意

仙は座禅を組み、読経を続け、元禄十五年（1702）一月十二日成仏した。境内にある「行人塚」は、石薬師像を造った松前意仙の墓で、市の史跡に指定されている。



府中市白糸台東部公園で昼食後、第三回参加者記念撮影
中田、伊藤、八木、折本、浅見
三浦、前北、中島、竹島

◎浅野長政 府中市 隠棲の地

白糸台幼稚園の碑

『都旧跡 浅野長政隠棲の地』

所在 府中市白糸台五丁目十三の一および十三の五

指定 昭和十二年七月二十二日

浅野長政（1544～1611）は安土桃山時代の大名で、豊臣五奉行の首座であった。はじめ織田信長に仕え、豊臣秀吉とは相婿で、秀吉に重用され若狭小浜城主となり、文禄の役（1592）



には軍監として朝鮮に渡った。文禄二年（1593）には甲斐22万石に増封された。のち五奉行は大きく分裂し、互いに反目し合い、長政は家督を長子幸長に譲ってこの地に隠棲した。この地は浅野家遺臣平田氏の屋敷である。やがて慶長五年（1600）に起こった関ヶ原の戦いには幸長と共に徳川方に

昭和四十三年十月一日 建設

東京都教育委員会



なお、前田利長は母芳春院（まつ）を人質として江戸に下向、異母弟利光（利常）と徳川秀忠娘珠姫との結婚を約し、二心無きことを示した。

この暗殺疑惑は家康と本多正信が画策でつちあげたものといわれている。

◇我々が訪問すると、幼稚園の門を開けて招き入れられる。

平田園長さんはすぐ出かけなければならぬがと言いながら「現在発掘中の最新資料です」と府中市が進めている発掘の写真を見せてくれた。急の訪問にも聞らず親切な対応に感謝する一行であった



◎染谷不動尊



江戸時代は不動明王を本尊とする「玉蔵院」というお寺があり、近くの上染谷八幡神社の別当寺であったが、廃仏毀釈で破壊された寺の後身が不動堂らしい。境内には国の重要文化財である「銅造阿弥陀如来像」を安置する小堂がある。また、上染谷の名のゆらいに ついて記した石碑がある。

◎常久一里塚跡

常久一里塚は江戸初期に整備された古甲州街道の日本橋から七里目の一里塚跡と伝えられているものである。古甲州街道は、染谷不動尊で左折し品川街道を進む。府中市内では、このほか日新町一丁目の日本電気(株)府中事業所内にある一里塚跡が「市史跡 甲州街道本宿一里塚跡」として府中市指定文化財となつて



いる。これも古甲州街道である。

◎国府八幡宮

国府八幡宮は聖武天皇の時代、一国一社の八幡宮として創立されたと伝えられている。



◎府中宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠二十九軒、問屋場三軒、総家数四百三十軒、宿場の長さ十一町六間、人口二千七百六十二人(男千三百八十六人、女千三百何十六人) 府中宿には飯盛旅籠八軒(男)もあった。樺通りの西側にある称名寺には、かつて旅籠屋だった杉島家の墓地があり、その一角には同家で抱えていた飯盛女の墓もある。樺通りの東側、宮町辺りが昔の新宿。宮西町辺りが番場宿、宮西町の南は本町。

この三町がかつての府中宿である。府中宿に行けば生活に必要な品が一通り揃うといわれ、近在の人々が買出しや行楽に出掛ける盛り場としても賑わっていた。『新編武蔵風土記稿』に「府中宿は郡の東の方にありて多磨川にそへる地なり、今、番場宿・本町・新宿の三宿に分ち、総てこれを府中宿といふ、江戸より甲府への街道駅場なり、三宿代る代る駅亭を開て旅客の人馬を

出せり、一月の内十二日は本町の持、余る日数を番場宿・新宿の二区にて分ち司とる。江戸日本橋より行程八里なり・・(以下略)」とある。

◎大國魂神社

縁起によると十二代景行天皇の四十一年、武蔵国魂くにたまとして大國魂神を祀ったのが始まりと伝えられる古社である。武蔵国府のもとで、国司の国内神社巡拝の便宜をはかるため、小野、小河、氷川、秩父、金鑽かなざな、杉山の六神社を合祀して六所宮むくしよぐうを称し、武蔵総社となった。その後、徳川家康が天正十八年(1590)に江



戸に入城し、翌天正十九年に社領五百石を寄進、慶長十五年(1610)には大久保長安に命じて本殿、拝殿、楼門などを修築させている。当社はもともと大國魂神社と称したが、中古以降、武蔵総社となり、また国内著名の神六所を配祀したので「武蔵総社六所宮」の社号を用い、明治四年(1871)に元の社号に戻し「大國魂神社」と称するようになった。

注) 六所神社 一ノ宮「小野神社」多摩市一ノ宮、二ノ宮「二宮神社(小河神社)」あきるの市二宮、三ノ宮「氷川神社」さいたま市大宮区、四ノ宮「秩父神社」秩父市番場町、五ノ宮「金鑽神社」埼玉県児玉郡神川町、六ノ宮「杉山神社」横浜市緑区、港北区と諸説あり不詳。

◎櫻並木

大國魂神社の北に、国の天然記念物「馬場大門櫻並木」が五百米ほど続いている。このケヤキ並木は、永承六年(1051)源頼義(988～1075)・



義家(1039～1106)父子が前22九年の役出陣の際、奥州安倍氏の討伐を祈願し、鎮定後の康平五年(1062)、ケヤキの苗を千本奉納したのが最初といわれ、徳川家康が関ヶ原の戦いや大阪の陣の戦勝を祈願し、その勝利を感謝して並木の両側に二条の「馬場」を寄進、ケヤキを補植した。

幡宮で元服、源賀茂次郎義綱 賀茂神社で元服、源新羅三郎義

(源八幡太郎義家 石清水八

光 佐竹、武田の祖、大津園城寺新羅明神の神前で(元服)

◎高札場・御旅所

府中街道と交差するあたりは「札の辻」と呼ばれ、甲州街道と北への川越街道、南への相州街道が交差する交通の要衝であり、幕府が道行く庶民に法令を徹底させるための高札を掲げる場所として好適の場所であった。高札場の裏は大國魂神社の御旅所で、五月の例大祭には八基の神輿がここに渡御する。(御旅所とは、神社の祭礼の神輿渡御に際し、本宮を出た神輿を迎えて仮に奉安する所。仮宮、頓宮、神輿宿。)



◎下河原緑道

かつて国分寺駅から市南部の多摩川にむかって敷かれた旧下河原線の鉄道跡がある。この鉄道跡は、下河原緑道として整備され、市民の散策路となっている。下河原線は、明治四十三年(1910)に多摩川の砂利運搬を目的とする東京砂利鉄道とし



て、国分寺・下河原(府中市南町三丁目)間に開通した。大正五年(1916)には軍用鉄道、大正九年(1920)には国有の貨物線となり、国鉄下河原線と改称。昭和八年(1933)には、東京競馬場の開設に伴い支線が設けられ、競馬開催日に限り旅客業務も行うようになった。その後は通勤者専用電車に利用されたが、昭和四十八年(1973)に武蔵野線の開通に伴い、六十六年続いた歴史の幕を閉じた。

◎坪の宮

坪の宮は大変古い神社で、大國魂神社と深い関係のある重要な神社です。小さな神社ですが大國魂神社のくらやみ祭では重要な役割を担っている。五月五日の例大祭の日、八基の神輿が旧甲州街道沿いの御旅所への渡御が無事終わると、国造代と称する神職が、この坪宮に参向して渡御完了の奉告をすることになっている。坪宮の祭神は武蔵国造であることから、国府が置かれ



る遙か前からこの地域を支配した有力者の氏神であった可能性がある。従って国衙もこの辺りにあったという説がある。「江戸名所図会」にもそのような記述がある。

◎高安寺・弁慶硯の井戸

足利尊氏ゆかりの名刹。室町幕府の將軍足利尊氏（1305～1358）が、元々この地にあった

武蔵国の安国寺が高安寺である。しかし鎌倉時代末期から南北朝の戦乱の時代には、崖の上にあったためこの寺はしばしば合戦の本陣になった。

境内には源頼朝の怒りを買って鎌倉入りを許されなかった源義経と武蔵坊弁慶が京都に向かう途中、この地に居住した折に、大般若経を書き写すために、境内にある井戸の水で墨を摺ったという伝説があり、今も「弁慶硯の井戸」と呼ばれる古井戸跡が残っている。

第四回 実施日 平成二十四年（2012）二月十六日（木）

分倍河原駅～日野駅 約八・四軒 累計約三十九・七軒

宿 日野宿

★集合場所・時間 南武線・京王線分倍河原駅改札口 午前九時

【第四回甲州道中行程】

分倍河原駅～内藤家冠木（かぶき）門～甲州古道本宿一里塚跡（NEC府中工場内）～本宿説明表示～秋葉大権現常夜灯～熊野神社古墳上円下方墳・秩父道子の権現道標～本田家～下谷保村常夜灯～谷保天満宮～清水の茶屋跡～上谷保村常夜灯（南養寺）～矢川～五智如来～おわんこ倉～青柳村の常夜灯～日野の渡し碑～東の地蔵～日野宿～日野本陣（下の名主佐藤家）～問

市川山見性寺を再興し、龍門山高安護国禅寺と号したのは始まりとされている。それ以前の寺は平将門を打ち取った功績で武蔵守となった「むかで退治伝説の俵藤太」藤原秀郷の館跡であったと伝えられている。尊氏は国と人々の平和を願って全国に安国寺や利生塔を建てた。



屋場跡・高札場の碑／日本陣上の名主佐藤家／八坂神社／宝泉寺／飯綱権現社／西の地藏／日野駅

◎内藤家冠木門

内藤家は旧本宿村の名主を勤めた。この冠木門は、幕末期に府中の本陣であった番場宿の矢島家の門を移したものだといわれている。

◎甲州古道本宿



碑がないと後日、資料を配布



◎甲州古道本宿一里塚跡

貞享元年（1684）以前の古甲州街道の一里塚跡。江戸から八

里目。

◇現在は南武線の西府駅近くにあるNEC工場の敷地内にある、見せて貰う。

史蹟甲州道中一里塚

一里塚は、江戸時代街道一里毎に作られた塚で明治以降交通機関の発達などに更始で多くは取り壊されている。その起点は

日本橋で、道の両側に土嚢を築き榎を植え行旅の便利を計ったものである。夏は緑陰が何より

の休息所となり、秋にはその実が飢えをしのぎ又、日本橋からの里程を知らせるのに役立ち旅人に親しまれた。甲州古街道は、府中宿からこの付近を通り青柳下へ出て多摩川を渡り、日野万願寺へと続いていた。丁度、ここは、江戸より八里の塚があった。よって、塚を復し碑を建て後世に伝える。

昭和四十三年十一月三日 日本電気株式会社 府中事業所





日本電気株式会社内の一里塚前、第四回参加者記念撮影
浅見、前北、嶋崎、竹島、伊藤、折本、中島、宇山、八木、相原、中田、三浦



伝えられている。江戸時代（綱吉治世の頃）、三尺坊大権現は「火伏せの神」として信仰を集めるようになり、本山とした秋葉山に因んで秋葉大権現と呼ばれるようになる。特に幾度となく大火に見舞われた江戸において広く信仰を集めるようになった。

◎秋葉（あきは）大権現常夜灯
秋葉大権現には諸説あり、平安初期（鎌倉時代、室町時代ともいう）に三尺坊という修験者が越後国栃尾（新潟県長岡市）の蔵王権現などで修行した後に現在の静岡県浜松市にある秋葉山に至り、ここを本山としたと



◎熊野神社古墳上円下方墳

日本で最大・最古の上円下方墳で、
 おおよそ七世紀の中頃の飛鳥時代に
 築造されたもの。上円下方墳は全国
 で四基あるのみ。一段目の下方部の
 一辺は約三十二米、二段目の下方部
 の一辺は約二十三米、三段目の上円
 部の直径は約十六米。高さは約六米。



◎本田家

本田家は、江戸時代、下谷保村
 の名主を勤め、江戸幕府の馬医者
 を務めていたため、この銅葺、四
 本柱の薬医門は客が馬に乗ったま
 ま門をくぐれる造りになっ
 てる。



◎谷保天満宮

関東三大天神（湯島、亀戸と）
 の一つ。表参道は現在の甲州街道
 がひらかれてからのもので、慶長
 （1596～1615）以前の古道は天
 満宮の南、段丘崖（府中崖線）の
 下を通っていた。



「天満宮略縁起」によると、菅原
 道真（845～903）が大宰府へ
 配流されたとき、三男の三郎道武^{みちたけ}
 27

も武蔵国多摩郡分倍庄栗原郷（栗
 原郷は府中と現在の谷保城山に
 かけての一带）に移されたが、父
 道真が亡くなったと聞き思慕の
 あまり父の像を刻み奉斎した。こ
 れが天満宮の始まりで、もと谷保
 田圃に続く本宿田圃の中州にあ
 る天神島（現府中市日新町のあ



たりとされ現在地より東南約一軒のところ)にあったものを養和元年(1181)に現在地に移したと伝える。

◎「滝の院」(谷保 5217)

天満宮の別当寺安楽寺の六坊の一つで、もとは滝本坊という。ここにあった阿弥陀如来座像は、法然上人および津戸三郎為守ゆかりの仏像との伝承で『新編武蔵風土記』や『武蔵名勝図会』などに記載されている「血文の阿弥陀」で、現在は谷保天満宮に保管されている。



「血文の阿弥陀如来像の伝聞」谷保天満宮安楽寺旧記によれば「法然上人が、為守の志をうけて阿弥陀の尊像を刻み、その胎内に上人自らの血を以って書いた所謂「血文」なるものを蔵す」とある。

◎清水の茶屋跡

天神坂下に「清水の茶屋」という立場茶屋があった。(立場とは人足・旅人の休憩場所)『江戸名所図会』では「甲州街道の立場にして、この辺こかし



ここに清水湧出するゆえに清水村の称ありといふ。この地の酒舗ありて、店前清泉沸流す。夏日には索麵を湛して行人を饗応せり。ゆゑにこの地往來の人、ここに憩ひて炎暑を避けざるはなし」と絵入りで紹介されている。明治末期まで営業をつづけていたとのこと。

◎南養寺と南養寺遺跡

『南養寺』は臨済宗建長寺派で山号を谷保山といい、立川市の普濟寺の末寺である。開山は、建長寺三十七世真照大定禪師の物外可什(？〜1363年)といわれ、開基は、武蔵七党にゆかり



りの立川入道宗成と伝えられる。本堂の前庭には、西に大悲殿と東に鐘樓があり、この地の千丑地区の藤井山圓成院(廢寺)の観音堂を移したものといわれ、安置されている寄木造りの十一面千手観音座像は鎌倉から室町時代初期のものとして推定される。また、鐘樓には、下谷保森島鑄物師・関家が安永六年(1777)に鑄造した梵鐘がある。



本堂の裏手には、江戸末期の枯山水様式の庭園があり、中世の板碑も数多く保存されている。

『南養寺遺跡』は「南養寺」と南の「くにたち郷土文化館」一帯で、縄文時代中期の集落遺跡として知られている。

昭和三十四年（1959）に正式な発掘調査が国立町教育研究会によって開始され、大きな成果をあげ、特に「くにたち郷土文化館」に展示されている「顔面把手付土器」は話題を集めた。

昭和五十七年（1982）からは、国立市遺跡調査会が中心となって、現在までに計一〇回の発掘調査が実施され、その結果、縄文時代八十棟、奈良・平安時代十九棟の住居跡などが検出された。昭和五十七年に南養寺の庫裡を改修した際に、縄文時代中期末の平面形が柄鏡へががみの形をして、床に石が敷かれた、「柄鏡形敷石住居跡」が発見され、「くにたち郷土文化館」の中庭に移築・展示されている。



◇小雪がばらつき、中島さんが良く調べてくれたおかげで、くにたち郷土文化館の広場にある屋根付きベンチで昼食を取り、濡れずに済んだ。



その後、雪が止むまでゆっくりと「くにたち郷土文化館」の内部を見学して再び街道歩きを再開する。

◎五智如来

密教で大日如来のそなえる五つの知恵を表す五つ如来にあてはめたもので、中央と四方に配されている。

※大日如来（中央に）
法界体性智
法界体性智大宇宙に遍満する絶対不変なる真理そのものであり、最高の知恵。

※阿閼如来（東に）
大円鏡地万物を写す鏡のように、この世の真実をありのまま見詰める知恵。

※宝生如来（南に）
平等性智
平等性智万物を差異あるものと見る意識を離れ、根源は平等と見詰める知恵。

※観自在如来（阿弥陀如来の異名）（西に）
妙觀察智
妙觀察智衆生の持つ差異をよく観察して、その特性に応じて教えを説く知恵。
※不空成就如来（釈迦如来の異名）（北に）
成所作智
もろの所作や教化を成就する知恵。

昭和初期までは地元の人による灯明や線香、供花が絶えなかったとのこと。



◎おわんこ倉

祭事で大勢の人寄せを行うときに使う漆器類を保管する倉庫。昔、村では一軒一軒で多くの漆器類を所有せず、共同で使用していたという。

◎日野の渡し碑

日野渡船場跡

日野の渡しは、現在の立日橋付

近で柴崎（立川市）と日野を結んでいた多摩川の渡しで、江戸時代貞享年間（1684～1688）以前は農耕のための作業渡しとして利用されていた。



この頃、甲州街道は下流の青柳（国立市）付近から万願寺渡船場から多摩川を渡り、万願寺一里塚を経て日野宿に至っていた。貞享元年（1684）甲州街道は青柳より上流の柴崎から日野渡船場で多摩川を渡り、日野宿に至る道筋に





変更された。これに伴い、日野の渡しは府中宿と日野宿を結ぶ正式な渡しとなり、

日野宿の経営となった。

三月から十月までは渡船、湖水期の十月から翌三月までは土橋

だったが、文政七年（1824）以降は一年中渡船となった。渡し賃は人と馬で別々に徴収されたが、武士、僧侶、宿の人々は無料で通行できた。明治維新後も日野渡船場の経営は日野町へ受けつがれるが、大正十五年（1926）日野橋の開通によって渡船は廃止となった。

日野市教育委員会

◎万願寺一里塚

貞享元年（1684）以前の古甲州街道の一里塚。江戸より9里目。一里塚は道の両側に土を盛り目印にしているが、ここでは片側（南側）のみが残っている。



◎東の地蔵

新奥多摩街道の入り口交差点が旧日野宿の入り口で、別名「福地蔵が祀られている。」



◇万願寺一里塚からモノレールに沿って、中央高速道路の下を潜り暫く行くと交通止め、旧甲州街道が無くなる工事に出くわす。

工事人は迂回路を勧めるが、中島さんは「甲州街道がなくなる前に歩きたい」と交渉する。工事人も困惑し「自己責任でどうぞ」と歩かせてくれた。



◎日野宿交流館

当館では、日野宿、甲州道中、新選組、自由民権運動等に関する資料を展示し、地域文化の継承と発展を図ると同時に、多世代の人々の交流、賑わいを促し、地域振興を図ることを目的としており、基本的に、平日は地域住民の交流施設であり、休日は、観光客のための憩いの場・交流の場となっている。



◇係員が全般にわたり詳細な説明をしてくれた。

民家には珍しい婚礼用の馬具が豊かな証拠と。東の地蔵辺りは日野煉瓦の製作場所であったとか・



◎日野宿

日野村は元々は日野本郷と呼ばれ、慶長十年（1605）宿場にとりたてられた。

宿は東から下宿、中宿、上宿とに分かれ、中宿には日野本郷の店主と日野宿問屋を兼帯して世襲した二軒の佐藤家の屋敷があった。西側の佐藤隼人家（上佐藤家）が本陣を、東側の佐藤彦右衛門



家（下佐藤家）が脇本陣をつとめた。本陣の建坪は百十七坪、脇本陣は百十二坪と大きな陣屋が並び立っていた。本陣の向かいには問屋場と高札場があった。本陣、脇本陣は嘉永二年（1849）正月十八日の大火によって焼失したが、下佐藤家は文久三年（1863）に再建され、本陣を務めた。これ



が現在の本陣です。当時、下佐藤家の当主をしていた彦五郎は嘉永三年（1850）に天然理心流三代近藤周助邦武（近藤勇の養父）の門に入り、屋敷に「佐藤道場」を開いた。ここでは近藤勇、土方歳三、沖田総司らが稽古に励んだという。妻のぶは、土方歳三の姉。

◎八坂神社

寛政十二年（1800）に再建された社殿は、日野市の重要文化財になっている。天然理心流近藤周助（勇の養父）の門人らが、剣術の上達を願って安政五年（1858）に奉納したといわれる額もあるが現在は非公開である。



◎銅造地藏菩薩坐像（坂下地藏）

正徳三年（1713）に、江戸小舟町の井田八左衛門が釈宗威信土菩薩のために造ったものである。日野をはじめ、八王子、青梅、



立川・大神・福生・由木にわたり、二百三十二人の合力を得て奉造したと蓮座に彫りつけてある。作者は、大昌寺の釣鐘・燈籠、谷戸の念仏鉦等を鑄造した江戸神田鍛冶町の田川民部藤原見歳である。永く甲州道中日野宿西の出入り口に鎮座して、ここを通行する旅人を見守り、彼らからは坂下地藏サマと親しみ敬まわれた。近来は、地元自治会の婦人達によって仏縁の日念仏供養が行われる。

日野市教育委員会

この西の地藏はお堂の中に祀られている。

◎如意山宝泉寺

宝泉寺は、臨済宗建長寺派の禅寺です。開祖は鎌倉建長寺の曇芳同応大和尚、創立は元徳年間（1330年頃）で、当初は姥



久保（現新町、中央高速が通るあたり）にありましたが、火災にあり、その後、現在の地に再建されたといわれています。

本堂は、平成十三年五月に新築落慶し、境内も整備し直されました。本尊は釈迦如来、脇侍に文殊菩薩、賢菩薩があります。また、「持ち上げ観音」の名で知られている、持ち上げた時に感じる重さ

によって吉凶を占う、約三十六センチメートルの馬頭観音の石像があります。この「持ち上げ観音」は鐘付き堂の隣にある観音堂の本尊でしたが、現在は本堂と客殿との間に安置してあります。客殿の南側には、古くから裏山を借景にした趣きある庭園があります。旧甲州街道に面した山門は六



脚ひのき造り、多数の檀家と近郊の有力者によって嘉永六年（1853）に建てられたものです。

◇井上源三郎の墓

宝泉寺墓地の奥まった所に井上家の墓所があります。墓所内には新選組六番隊長・副長助勤井上源三郎（戒名〓誠願元忠居士）の墓碑が建てられています。

墓誌には、源三郎と共に兄松五

郎（戒名〓清松軒仁口智勇居士）、源三郎の死をみとった泰助（戒



名〓泰岳宗保居士）の名も見られます。

（日野市観光協会ホームページより）



第五回 実施日 平成二十四年(2012)三月十五日(木)

日野駅～高尾駅 約十一・五軒 累計約五十一・二軒

宿 横山宿(隔月で八日市宿)

★集合場所・時間 JR日野駅改札口 午前9時

【第五回甲州道中行程】

高幡山八十八か所石碑～上人塚(日野自動車工業)～富士塚(コニカミノルタ)～地盤沈下観測所～大和田旧道・道標～大和田橋焼夷弾弾痕～竹の花公園・竹の鼻一里塚碑・芭蕉の句碑・永福稲荷～市守神社～八王子市道路元標～八日町交差点～八日市宿跡～時の鐘～信松院～産千代稲

荷神社・大久保長安陣屋跡の碑
～追分道標～千人同心屋敷跡碑
～宗格院・石見土手～馬場横丁
石柱～道標・鍵の手～横山支所・
オオツクバガシの巨木～多摩御
陵入口～東浅川駅跡～熊野神社・
榎と樺の合体～高尾駅

◎高幡山八十八か所石碑



◎上人塚

日野自動車本社工場の敷地内にある。説明板には「いつの頃か、美濃(岐阜県)の齋藤家の落人、佐藤三郎兵衛が日野に住みつぎ、野武士や野盗等の外敵から百姓たちを保護したことで信頼を得、名主となった。その折、名主推薦に関する連名文書を二通作成し、一通を幕府に提出し、他の



一通を当地に埋めてその上に榎を植え、これを『請人塚』と呼んだ。後に狐が狸が化けて上人の姿をするので『上人塚』と呼ばれるようになったといわれる。また、昔烽火台に使われたとする説もあるが本来は古墳であろうと推察される。

中央のエノキ(にれ科)は目



通り幹囲四・二米、樹高約十五米で、根元より約二米の高さより五本の太い幹に分かれ、約十米四方に枝をひろげて全体としてこんもりとした樹形をなしている。

昭和三十年十月一日指定
日野市教育委員会」とあつた。



◇当日は日野自動車本社工場の担当者による案内により、上人塚に登らせて貰い、かなり堅い感触を掴んだ。

日野市指定史跡
しようにんづか
上人塚

昭和三十六年十月一日指定

元禄年間の文書に「請人塚」という記述があることから、江戸期には存在していたと考えられる。

塚の由来については、美濃（現在の岐阜県）から移り住み、日野用水を開削するなど日野発展の基礎を作った佐藤隼人を称えるため、隼人の業績を記した書を埋納したものという説がある。また、かつてこの一帯が荒れ野であった時に、狸や狐が上人に化けて甲州道中を行く人をたぶらかしたため、「上人塚」の名が付いたという説もある。

平成十八年（二〇〇六）から行われた発掘調査の結果、この塚の基部には黒土を突き固めた一辺十五メートル余りの方形の中世の塚があり、その上に江戸時代の円形の塚がかぶさっていることが明らかになった。塚の性格は不明だが、祭祀を行った場所か、土地の境界を示す標識として築かれたものと推測される。

日野市教育委員会

◎ 富士塚

コニカミノルタ工場の敷地内にある。説明板があれば読んでみたい。



◎ 大和田町旧道の道標

十六号バイパスの先、左手の細い道（旧道）を入れて約二百米、左側にある大和田町会館の前に石造物がある。なかに道標があり、「安政五年江戸むら大和田道」と読める。



◎ 富士見橋の標柱

昔はここから富士山が見えたかも。

◎ 大和田橋

『分間延絵図』には「歩行越場 平水川中十五間程 此川夏秋之間 歩子越 冬十月ヨリ翌春 三月マデ仮土橋ニテ通行」とある。

明治三十八年(1905)に木造橋として常設された。昭和二年にコンクリート橋となる。また、『宿村大概帳』には「右川毎年四月より九月迄歩行渡り、十月より翌三月迄橋渡り、尤(もつとも)右土橋之儀は大和田・子安・元横山三ヶ村にて掛け渡し来り候処、文化三寅年より大和田村にて掛渡来る」とあり、川越人足賃は文政七年(1824)に次のように定められた事が記されている。

「定

太股通水式尺余 人足壹人に付式拾文

腰帶通水式尺五寸程 同參拾壹文

乳下水三尺程 同四拾貳文

但、木馬壹疋之荷物人足四人掛り、



軽尻荷物同式人掛り、乗物山駕籠連台

老挺に付人足六人掛り、

右の通可取之、若於相背は可為曲事ものせ

文政七年申月

奉行」

◎大和田橋・焼夷弾弾痕

焼夷弾・弾痕の保存について

八王子市は太平洋戦争終結の十三日前、昭和二十年八月二日未明に米空軍B二十九爆撃機百八十機の空襲を受け、約



四百五十名が死没、二千余名が負傷し、旧市街の約八十%の家屋が消失する被害を受けました。そのとき多くの市民が大和田橋の下に避難し、尊い命が助かりました。

大和田橋の歩道上には、この空襲の時投下された焼夷弾の跡が十七箇所残っています。車道の部分は過去の補修により、弾痕は残っていませんが、現在歩道上に残っている弾痕の数から推測する



と橋全体では約五十個以上の焼夷弾が投下されたと思われます。建設省相武国道工事事務所では、この大和田橋の補修工事にあたり焼夷弾の弾痕を保存し太平洋戦争の痕跡を永く後世に伝えるものです。

弾痕の保存については、上下歩道上各一箇所は透明板で覆い、他十五箇所は色タイルでその位置を示してあります。

平成九年十月

建設省関東地方建設局・相武国道工事事務所

◎竹の花公園と名づけられて竹の鼻一里塚と永福神社境内と市民の憩いの場になっている。



◎永福稲荷

横山宿の入り口にあり、「新編武蔵風土記稿」には、「社地、十坪許、往還の側竹森の中にあり家福稲荷と号す。この地の鎮守なり、・・・」とある。境内には、庚申塚と「芭蕉の句碑」がある。大祭として「しゅうが祭」が九月第一土曜日に行われている。



◎新町竹の鼻の一里塚碑

ここ新町の一里塚は甲州道中八王子宿の東の入り口に位置し、江戸から十二里にあたります。

明治三十年（1897）の八王子大火で焼かれるまでは、大榎が涼しい木陰を作り、往時をしのばせていたようですが、現在は付近で鍵の手に曲がる道筋が昔の面影をわずかに残しています。



竹の鼻一里塚前、第五回参加者記念撮影

立っている人、左から嶋崎、相原、三浦、中島、浅見、前北
座っている人、左から竹島、八木、宇山、伊藤、折本、中田

◎市守神社・大鳥神社

市指定史跡 市守神社

所在地 八王子市横山町一番地

指定年月日 昭和三十一年七月二十八日

天正十八年（1590）八王子城の落城とともに八王子の町は現在に移され、横山宿では毎月四日、八日市宿では八の日の日に市が開かれ賑わった。そこでこの市の取引の平穩無事を守り、人々に幸せを与える市神として

「倉稻魂命」を祭ったのが、この神社のはじまりで横山市村稻荷と呼ばれた。毎年二月初午の日には例祭が行われる。江戸時代中期になって「天日鷲命」が配祀され毎秋十一月の酉の日に「大鷲祭」が行われる。

昭和五十二年三月二十日

八王子市教育委員会

「倉稻魂命」は、市場の守護神で、厄除け・開運・出世・商売

繁盛・学業成就・縁結び・交通安全など靈験あらたかな神様。

「天日鷲命」は大鳥神社の祭神で、殖産および武勇の守護神で、



広く庶民の間に人気がある。開運・出世・商売繁盛・厄除け・縁結び・学業・技芸成就などの広大な神徳があるとされる。

◎横山宿

本陣二軒、脇本陣四軒、旅籠三十四軒、問屋場二軒、総家数千五百四十八軒人口六千二十六人（男三千百十二人、女二千九百十四人）、宿場の長さ三十五町四間

八王子宿は八王子十五宿とも呼ばれたが、横山宿と八日市宿が本宿で隔月で務めた。

十五宿は新町、子安、横山、本宿、馬乗、寺町、八日市、横町、上野原、八幡、小門、八木、久保、本郷、島ノ坊。

戦国時代は北条氏照の支配下にあり、北条氏の枝城として八王子城があったが、天正十八年（1590）に豊臣秀吉の小田原攻めにより落城。同年、徳川家康の関東入国に伴って八王子に入った大久保長安は八王子の町づくりをはじめた。

代官頭八王子総奉行となった長安は八王子城下三宿を移転し、盆地の中央に新たな甲州街道を設定する。その中心に置いた八幡、八日市、横山の三宿を宿場町・町人屋敷とした。また、行政・司法の府として石見屋敷（石見陣屋）を新八王子宿のおおよそ中央に置き、その外側南北には寺院群を置いた。天正十九年（1591）、長安四十七歳のとき、小仏関所番川村帯刀（小田

原北条の遺臣)の上書によって、関所を小仏峠から現在地の駒木野に移した。また、小仏峠に八王子宿でもっとも近いところに千人同心屋敷を置き、軍事上の拠点とした。

甲州街道八王子宿の東西の入口、新町と千人町西端(長房団地入口付近)は鍵形とし、防御施設とした。また、治水工事としては石見土手と呼ばれる土盛りの堤を築き、浅川の氾濫を防ぐとともに町囲いの土手とした。今日の八王子旧市街地の原形は長安によって、おおよそ完成したと考えられる。なお、横山宿の本陣がどこにあったかはよくわかっていない。

◎八王子市道路元標

説明板によると、八王子市の道路元標は大正九年(1920)、当时市庁舎があった「八幡町三番ノ一」に定められていたようだ。



◎八日町交差点

江戸期にはここに高札場が置かれていた。ここから八幡町交差点までの四百五十米が八日町。かつての八日市宿です。中間に「八日市宿」の標柱が立てられている。

八幡町交差点から北へ向かう国道十六号線は、江戸期には八王子宿より日光へ向かう重要な道であった。八王子千人同心が



「日光火の番役」として往来した道。

八幡町交差点からは八幡宿。本郷横丁交差点からは八木宿。

◎ 念仏院（時の鐘）

元禄十二年（1696）に八日市宿の名主、新野与右衛門が発願主となり、千人同心や近郊の人達が費用を出し合ってできた。鋳物師は神田鍋町の椎名伊豫。太平洋戦争の際、供出は逃れたが空襲により鐘楼は焼失。昭和二十七年に再建された。昭和の初めまで明け六つから暮六つを告げていた。

注）明け六つ、暮六つ『明け六つ』とは、日の出前に星が見え

なくなる時刻をいい、『暮六つ』とは、日が暮れて星が見える時刻をいう。昼夜とも順に、六つ、五つ、四つ、九つ、八つ、七つ、六つと数えた。

明け六つ↓朝五つ↓朝四つ↓昼九つ↓昼八つ↓夕七つ↓暮六つ。
暮六つ↓宵五つ↓夜四つ↓夜九つ↓夜八つ↓暁七つ↓明け六つ。

鐘の数からその数を時刻と呼ぶようになった。易学から九がお目出度い数として正午と決める。二時間置きに八つ、七つ、六つ、五つ、四つと数えてまた九つに戻る数え方です。



現在の時間を当てはめるには九から現在の幾つかを引いて二倍すると計算が出来る。(例、六つとは (9-6) x2 = 6(六時))

◎ 産千代稻荷神社・大久保長安陣屋跡

小門町一帯の地は大久保石見守長安陣屋のあった所で、産千代稻荷神社の境内に記念碑がある。この辺りは陣屋の西端であったとされる。天正十八年(1590)、後北条氏が滅亡し、徳川家康が関東に入国し、江戸を中心とする領国支配が始まり、最重要視された蔵入地(直轄地)の支配は代官頭の伊奈忠次(後述)・大久保長安(後述)・彦坂元正(後述)と配下の代官・手代によってなされた。彼らは財政・交通政策をはじめ鉱山開発など幕政の中枢を担当した民政官であった。その中で最も精力的に活動した代官頭大久保長安の陣屋が八王子に置かれた。八王子代官いわゆる関東十八代官の名で総称される諸代官の屋敷も長安陣屋を中心にこの地に集中設置された。武蔵国を中心に関東各地を





支配する地方行政の拠点となったのです。同時に直参の八王子千人同心も設置され配下に置かれた。

『新編武蔵風土記稿』には「大久保石見守陣屋跡、宿の南表にて上野原金剛院の北にあり、元禄年中（1688～1704）の凶を闊するに陣屋の中央より西南北の三方に土手あり、いつの頃か北の方なる土手を取崩せしが、十年前に又南の土手をも穿ち

り、その後又西の方なる土手を取崩し唯土手の上の稲荷社の所のみ古の形僅に二間四方ばかりをのこせり」とある。そして、

慶長十九年（1614）、長安の没後は代官の近山五郎右衛門の屋敷となり、のち畑地となつて、その広さは六段二畝十五歩（約六千二百平米）あったと記されている。やがて在地支配機構の整備・幕政の転換により十八世紀初めまでには、これらの代官屋敷は廃止され、代官は江戸城下の屋敷へ定住することとなつた。

【伊奈備前守忠次】天文十九年（1550）～慶長十五年（1610）

江戸初期の代官頭（関東郡代の前身）。忠家の長男として三河国幡豆郡小嶋（愛知県西尾市）に生まれる。徳川家康の近習と

なり、五カ国領有時代の徳川領国の農政に尽力した。天正十八年（1590）の小田原城攻撃では、道路や河川の普請、兵糧の管理などを担当。その後徳川氏の関東移封の際、代官頭となる。武蔵国鴻巣・小室領で一万国の知行を与えられ、足立郡小室に陣屋を構え、関東各地のほか三河・遠江・駿河地域まで支配を行った。支配地は百万石を超え、各地で検地、知行割、河川改修、新田開発などを担当。その地方支配の方法は、備前検地、備前堀、伊奈流などと呼ばれ、享保改革期まで、幕府の中心的な位置を占めた。利根川や荒川の付け替えも行った。

現埼玉県北足立郡伊奈町は忠次が町の名の由来、子の忠治は茨城県筑波郡伊奈町（現在のつくばみらい市伊奈地区）の町名43の由来となっている。

【大久保石見守長安】天文十四年（1545）～慶長十八年（1613）

天文十四年（1545）猿樂衆大蔵太夫の二男として生まれ、名を藤十郎。のち武田の家臣土屋直村から土屋姓を授けられ、兄新之丞（長篠で戦死）とともに十分に取り立てられて地方支配に当たる。天正十年（1582）武田氏滅亡ののち徳川家康に登庸され、大久保忠隣の庇護を受けて大久保十兵衛と改称した。家康の甲斐経略には蔵前衆（代官衆）として頭角を現し、天正十七年（1589）・十八年（1590）の新政策実施過程では伊奈忠次を補

佐して業績をあげ、同十八年八月、家康の関東入国後は武蔵国八王子（八王子市小門町）に陣屋を設けて検地・知行割をはじめ、八王子・青梅・桐生の町立等を担当した。長安の検地は石見検地・大久保縄とも呼ばれ、伊奈忠次の備前検地と並んで初期の幕府検地の代表的仕法となった。

慶長五年（1600）の関ヶ原の戦いでは小荷駄奉行を勤め、また徳川秀忠軍の先導として、木曾谷・東美濃の制庄にも卓越した軍略手腕を発揮した。

徳川氏の覇権確立後は家康の側近勢力となり、その支配領域は関東地方から甲斐・信濃・美濃・越後・佐渡さらに伊豆・大和・近江・石見へと急速に拡大し、領高は百二十万石といわれるほどの権力者に成長する。当時の長安は駿府・江戸を拠点として各地に出先機関を設け、直系の代官・手代を配置して産業開発と在地勢力の掌握に努めた。

関東十八代官、佐渡の大久保山城、宗岡佐渡、木曾代官の山村甚兵衛らはその代表的な存在であるが、産業面では石見・佐渡・伊豆の鉱山と木曾の林業開発に驚異的な成果を上げた。特に佐渡の金山では直山制と選鉱に水銀流し（西洋のアマルガム法）などの新法を採用することによって歴史的な増産に成功しました。他方、里塚や伝馬宿の設定による東海道・中山道の交通制度の確立をはかり、また江戸・駿府・名古屋の築城工事に

も参与して、資材の調達面で優れた才能を発揮した。

慶長八年（1603）従五位下石見守に叙任された長安は、家康の財政智能として字義通り八面六臂の活躍をするが、同十七年（1612）七月駿府で中風を患い、翌十八年（1613）四月二十五日、六十九歳で没した。

死後、この真相は分からないが（本田正信・正純の讒言か）、生前の陰謀私曲を理由に一族が死罪となった。石川康長（松本領主）以下大名や代官の多くが連座して失脚した。

『国史大辞典』（吉川弘文館刊）より抜粋

大久保石見守長安に関する歴史

天文十四年（1546）長安生まれる。（大蔵藤十郎）

天正元年（1573）武田信玄没。

天正三年（1575）長篠の戦い。武田勝頼大敗。

天正四年（1576）長安結婚。本願寺執事（家老）下間頼竜の

四女 勝。

天正十年（1582）三月十一日武田勝頼自刃（天目山麓田野）。

武田氏滅亡。

四月三日 恵林寺焼き払い。

六月二日 本能寺の変

十月 長安、躑躅ヶ崎館の南、尊躰寺にて

徳川家康に謁見。

天正十八年(1590) 豊臣秀吉、北条攻め。

六月二十三日 八王子城落城。(氏照) 元龜三年(1572)築城。

七月十一日 小田原城落城。(氏政)

八月 一日家康江戸城入城。二百五十万石

(内、百万石直轄天領、百五十万石 家臣に知行割り当て)。

長安、知行 横山八千石。(支配地は旧北条

氏照領九万石) 五百人同心。

天正十九年(1591) 長安、八王子に赴任。関東代官頭になる。

関東代官頭 東関東・伊奈忠次

東海伊豆・彦坂元正

西関東・大久保長安

慶長三年(1598) 八月十九日秀吉没。

慶長四年(1599) 三月三日前田利家没。

長安、千人同心に増。

九月 長安、(大和)郡山代官。

慶長五年(1600) 関ヶ原の戦い。

慶長六年(1601) 長安、甲斐奉行。八月石見奉行、九月美濃

奉行。

慶長八年(1603) 二月十二日家康征夷大將軍となり

江戸幕府を開く。

七月長安、佐渡奉行。

慶長九年(1604) 長安、一里塚総奉行。

幕府、東海道・東山道・北陸道に一里塚を置く。

慶長十年(1605) 徳川秀忠二代将軍となる。

慶長十一年(1606) 江戸城本丸増改築。青梅成木村・

小曾木村より江戸城の壁に塗る石灰

を採取し運ぶために拓いた道路が青梅街道。

慶長十八年(1613) 長安没。六十九歳

元和元年(1615) 大阪夏の陣。豊臣秀頼自決二十三歳。

淀君自決四十九歳

元和二年(1616) 家康没。七十五歳

.....

大久保石見守長安の地位と直接支配地(すべて兼任)

●加判・年寄衆(老中) ●所務奉行(勘定奉行) ●一里塚総奉

行 ●八王子九万石 ●八王子千人同心の創設・統率 『総代官』*

関東代官頭(関東百万石) *大和代官(郡山六万石) *美濃代

官(岐阜七・三万石) *甲斐奉行(甲府二十四万石) 『金山奉行』

*石見奉行(四・八万石と银山) *佐渡奉行(二万石と金山) *

伊豆奉行(七万石と金山)

↳ 講談社 堀和久著「大久保長安」より

【彦坂元正】

三河の国人で今川義元に仕えた彦坂光景の嫡男。今川氏没落後に徳川家康に仕えた父と共に、代官として活躍した。天正十一年(1589)には、当時の徳川氏が領した三河・遠江・駿河・甲斐・信濃の総検地を奉行として取り仕切り、翌年の北条氏滅亡後に入府した家康に従い天野康景、板倉勝重らと共に江戸町奉行に任じられ、江戸の発展に貢献し、主に検地や街道整備を担当した。

慶長五年(1600)の関ヶ原の戦いでは大久保長安、伊奈忠次ら三目代のひとりとして小荷駄奉行を担当するなど後方支援を行った。戦後石田三成の居城佐和山城の引渡し、毛利氏の支配した石見の銀山の接取などを行っている。江戸幕府成立後、大久保長安、伊奈忠次らと関東代官を任じられ、主に東海道方面の幕府天領を管轄した。

◎信松院

武田氏滅亡後、難を逃れてこの地に草庵をいとなんだ信玄の息女松姫(信松尼)ゆかりの寺で、開基は松姫、院号はその法名に由来する。松姫の墓は本堂むかつて右手の墓域中腹に立っている。寺宝には武田氏関係のものが多い。なかでも木製軍船ひな形大小二艘(都有形)は文禄の役(1592朝鮮出兵)に小



早川隆景が使用した軍船のひな形でこれに従軍した仁科氏がつくった貴重な資料である。信松尼百回忌にあたる正徳四年(1714)、その兄仁科盛信の子孫資真すけまことから寺に寄付されたもので、軍船寄進状や寄進目録が添えられている。

信松院の開基「信松尼」について

信松尼は、武田信玄の四女(一説には六女)。俗名は松姫。永禄四年(1561)生まれ、元和二年四月十六日没。享年五十六歳。法名「信松院殿月峰永琴大禅定尼」。勝頼の十七歳下の異母妹。天正十年(1582)高遠城で討ち死にした高遠城主仁科盛信の四つ違いの妹。永禄十年(1567)七歳のとき織田信長の嫡男奇妙丸(信忠)十一歳と婚約。五年後元龜三年(1572)三方ヶ原の戦いの年破談。松姫はその後信忠を心の夫として操を通していた。

天正十年(1582)二月中旬、身を寄せていた高遠城を兄仁科盛信の一女督姫をつれて逃れ、新府城、古府中、塩山の向嶽寺を経て、大菩薩峠を越えて、北条領の八王子城下恩方の地に三月下旬に着いた。出迎えたのは城下随一の巨刹である禅寺・心源院(下恩方)のト山和尚ぼくせん。向嶽寺の和尚とト山和尚とは同門。ト山和尚が領主北条氏照の内諾をえて、心源院の支院・金照庵(陣馬山麓上案下)を建てそこに住まわせた。松姫がト山和尚に懇願して仏門に入ったのはこの年(天正十年)の秋であった。法



名を「信松尼」と号した。

仏門に入った理由は

(俗説) あまりの美しさに、北条家の重臣や城下の富豪が信玄の娘とも知らずに恋慕し競い合うように求婚してきた。その煩わしさを断ち切るため。

(真相) 戦乱で非業の死を遂げた父信玄をはじめ、兄たち一族、家臣の菩提を弔うため。

(直接の動機) 心の夫とき



めた織田信忠の死。信忠は同年六月二日に明智光秀の軍勢に攻められ、二条城で憤死した。その事件が秋口になって松姫の耳に入ったから。

金照庵では、松姫(信松尼)、その姉(信玄の次女)である穴山梅雪未亡人の見性院、勝頼の娘貞姫、前述の督姫、小山田信茂(岩殿城主、信玄のいとこ)の娘、香具姫と隠棲していた。が、天正十八年(1590)秀吉の

北条攻めが始まり、横山の里に逃げかくれた。(御所水の里と呼ばれる所。富士森公園あたり)

大久保長安が領主となり、信松尼が信玄の娘松姫と知り保護した。長安は信松尼が推挙する武田・北条の遺臣を登用(五百人同心)し、また、信松尼は自ら手本を示して養蚕、機織り、染め物の産業を育てた。

講談社 堀和久著「大久保長安」より

◎追分道標

この道標は文化八年(1811)、江戸の足袋職人、清八が高尾山に銅製五重塔を奉納した記念として、江戸から高尾山までの甲州街道の三追分、すなわち新宿と八王子追分と高尾山麓小名路の三か所に建てた道標の一つである。昭和二十年八月二日の空襲による破損で四つに分かれ、そのうち一片が不明となった。尚、新宿の道標は行方不明。小名路の道標は八王子市郷土資料館に保管されている。



◎千人同心屋敷跡碑

追分町から千人町にかけてはその町名が示す通り、千人同心頭の拝領屋敷を中心に同心の居住地があった地域である。

千人同心について

兵農分離をたてまえとする幕藩体制のもとで八王子千人同心はきわめて特異な存在であった。軍事・民政上の拠点として重視された八王子にあって千人同心は甲州境の警備・治安維持の

軍事的機能を主とする郷土集団であった。しかし、千人町に居住する百名前後を除く同心は、周辺農村に居住し徳川直参としての公務を果たす以外、平常は本百姓ほんひやくしやうとしての生活を続けたのである。その祖型は、甲州武田氏時代の小人頭こじんがしら(九口筋奉行*注)を中心とする国境警備の家臣団で、武田氏滅亡後、家康の支配下に入り家康の関東打入りとともに小人頭九人(のちに十人に増加)



以下二百五十人が八王子城下に移された。

その後五百人に増員され千人町に移住、慶長五年(1600)に一千人となり名実ともに千人同心が成立したといわれる。

その組織は、旧武田家臣である十人の千人頭(500~550石取りの旗本)のもとにそれぞれ百人の同心(三十俵一人扶持~十俵一人扶持の御家人)を配し、各組は十人ずつに分けられ十人に一人の組頭を置いた。成立期には老中支配下にあったが享保改革以後は槍奉行下に配された。幕政初期には、関ヶ原や大阪の



なったが、大半の者は着農した。

千人頭石坂弥次右衛門義礼は、慶応四年(1868)、最後の日光警備の責任者として徳川家祖廟を官軍に無血引き渡したが八王子に帰ったのちその責を負って自刃した。墓は千人町一丁目の興岳寺の墓域にある。

陣への軍役を担ったが元和以後は將軍上洛や日光社参時の供奉などをつとめ、慶安五年(1650)以後は幕末まで日光火の番を主要任務とした。寛政期以後の蝦夷地(北海道)への入植、開拓と警備の活動は特筆すべきものがあつた。幕末動乱期には横浜警備、長州出兵などの任務を分担した。幕府崩壊とともに千人同心は一部が徳川に帰参し、また新政府につかえる身と

※注、九口九筋衆

武田の軍制の一つで、九筋衆と呼ばれる武士団があつた。甲斐への出入り口は九か所。

御坂路口(沼津往還)、左右口路口(富士道)、河内路口(身延路)、若彦路口(駿州道)、睦合路口(梅ヶ島道)、萩原路口(大菩薩峠道)、雁坂路口(秩父往還)、穂坂路口(信州道)、逸見路口(棒道) 以上の九口九筋です。

九筋衆は、これら国境を常時警戒し、情報収集、年貢未納の催促などにあたっていた。九筋衆の頭は、足軽・小者を三十人ずつ付属させていたので、小者頭、あるいは小人頭とも呼ばれた。部下の三十人は、雑兵とはいいながら甲州槍の手練を選び、精鋭として聞かえている。彼らは、普段は農耕に従事する屯田兵であつた。



◎ 宗格寺・石見土手

千人同心ゆかりの寺。開基開山は元武田家臣、山本土佐忠玄の子、价州良天和尚によるとい
う。墓地には千人頭の山本・河西・栗原家の墓や松本斗機蔵の墓がある。また、代官大久保長安が浅川 治水のために築



町、元本郷町に、下流は新町甲州街道沿いに築き、土手に竹などを植えたと言われている。明治末頃まで所々に残存していたが、現在はここ宗格院境内に往時をしのぼせる石垣堤が約六十米ほど残っているだけである。』とある。

★松本斗機蔵の墓 説明板には『宗格院は、千人同心ゆかりの寺である。斗機蔵（胤親）は、千人同心組頭・胤保の長男で、寛政

五年（1793）の生まれと考えられている。幼少より学問を好み、塩野適齋の門に入り、のち湯島の昌平坂学問所で、天文・地理・兵制等を学び、洋学を修めた。江川太郎左衛門英龍・渡辺崋山らと交わり海外事情に極めて精通し、日本開港を主張した。

天保八年（1837）水戸藩主徳川斉昭に「献斧微衷」と題した上書を献じ海防問題を論じている。

天保十二年（1841）九月十九日、四十九歳で急逝した斗機蔵の墓は渡辺家の墓域右手奥にある。法名は「鏡覚院文英胤親居士」である。』とある。



いた堤防「石見土手」の一部（約60m）が残されている。

★石見土手 説明板には『八王子総奉行「大久保石見守長安」は、高尾山、景信山を水源とする。浅川のためかさなる氾濫を憂慮して、慶長年間川沿いの堤を築いた。これが「石見土手」と呼ばれ、上流は千人町、日吉



◎馬場横丁の石柱
石柱の説明には、「江戸時代に千人隊拝領の馬場が宗格院の北側現在の五小前の通りに有ったので当時からこの所より宗格院迄の道を馬場横丁と呼んでいた。……」とある。

◎鍵の手と道標

長房団地入口の信号で右折しすぐに左折。ここが「鍵の手」で道標もある。また、追分からここ までが千人町で、千人同心の拝領屋敷が並んでいた。



◎推定「散田の一里塚」

20号線の左側に八王子市役所横山事務所があり、その脇に鉄柵で囲われた土盛りがある。

この辺りに「散田の一里塚」があったと思われるが、一里塚が造

られた江戸時代初期の甲州街道は、今のJR中央線の南側・散田町を通っていたと思われる。

◎東浅川駅跡

大正十五年十二月二十五日大正天皇が崩御されると多摩御陵が造られ、大正天皇の遺体を運ぶための駅が造られることとなり、皇族専用駅として東浅川駅が昭和二年一月三十一日開設された。戦前は、天皇・皇族の御陵参拜のためお召し列車が運転されたが、戦後は、自動車が使用されるようになったため、ほとんど使用されることがなくなる。そして、昭和三十七年に八王子市に払い下げられ、「陵南会館」と名付けられ一般に解放され、市民の集会施設に利用された。平成二年過激派の放火により旧駅舎は焼失し、現在は無い。多摩御陵からの参道が甲州街道に突き当たる向かい側が、陵南会館の敷地であつて東浅川駅のあつた場所である。敷地の広さが、かつて皇室用の格調高い大きな駅のあつたことを物語つ



ているようだ。中央線の西八王子駅から高尾方面へ少し進むと、かつての東浅川駅への路盤が右手に別れ、平行する形で東浅川駅跡へ進んでいる。線路側から見ると、駅跡には、ホームの跡らしきコンクリートの遺構が残されている。

◎熊野神社

ここには大きな檜の木と樺の木が合体してしまつた巨木がある。「恋が成就する木」と呼ばれています。

『昔の恋の物語』



今から四〇〇年の昔、八王子城主北条氏照の家臣、篠村左近之助に安寧姫という、美しい娘がおりました。氏照はこの娘を大変可愛がり城下の月夜峰で催される宴にはいつも傍に置いていました。宴ではよく獅子舞が演じられ、その中にひときわ上手に笛を吹く狭間の郷士の息子という若者がいました。氏照は笛の名手でありましたから、この若者を宴に呼んでは笛

の音を楽しむのでした。安寧姫、とこの若者はしばしば顔を合わせることとなり、いつしか恋が芽生えるようになりました。そして、この木の下で逢瀬を重ねていたという。その後二人がどうなつたか定かではありません。(古老の話) この木は樺と樺が根元で一緒になつて成長した相生の木でしたので、いつしか「縁結びの木」と呼ばれるようになりました。この木の根元に自分の名前と思いを寄せる人の名前を書いた小石を二つ置くと、願いが叶うと言われています。

『お杓文字様の由来』

中央線の南側の畑の中に杉木立があり、中に小さな石の祠があった。ばばあ森とも、またの名をお杓文字様と言って、いつも杓文字が納められていた。その杓文字を借りてご飯をよそっ



て食べると、たちどころに風邪が治ると、言い伝えられ、ばばあ森は大正年代まで付近の人達から信仰の対象として崇められていたらしい。その祠は、京王線高尾駅の拡張に伴い、熊野神社境内に移された。

なお、そのそばにちぢい森もあつたが、明治三十四年中央線の開通とともに、無くなったが、その場所は、今の信号あたりであるとか。ちぢばば夫婦は紀州から熊野神社の御影を以つて当地に祭られた祖であると言われている。

第六回 実施日 平成二十四年四月十九日(木)

高尾駅～相模湖駅 約十一・八軒 累計約六十三軒
宿 駒木野宿・小仏宿、小原宿・与瀬宿

★集合場所・時間 JR高尾駅北口改札口 AM九時

【行程・見どころ】

高尾駅～小仏関所跡～念珠坂・五基の石碑～蛇滝道標～寶珠寺～小仏峠・明治天皇小休所跡碑～小原の郷資料館～小原宿本陣～相模湖駅

◎両界橋付近

『小淵』この川は南浅川で、橋の左手は「小淵」と呼ばれ高



尾山麓では特に景観が良い所で、昔より高尾の名所の一つでした。この南浅川は、付近に小さな断層がいくつも見られることから、長い年月のうち「断層」に沿って自然に作り出された川と思われます。もともと、南浅川はこの橋から今の20号線に沿って東へ流れていたのを、元和年間中から寛永年間に至る二十余年懸けて南北に堀割って現在の位置に変更した。

『両界橋』名前の語源は分からないが、高尾山薬王院の仏法の世界と現実の娑婆世界とを分ける領地境界であったからだろうか。

『中央線第一浅川橋梁(煉瓦積橋台)』





◎駒木野宿

本陣一軒、脇本陣一軒、問屋場三軒、総家数七十三軒、人口三百五十五人（男百七十八人、女百七十七人）、宿場の長さ十町。駒木野は宿の入口から順に、下宿・中宿・上宿と十町にわたって続く。宿入口は南浅川を渡る両界橋で、小名路辺りが下宿で、関所が中宿、摺指が上宿となる。本陣は関所手前の空き地で、脇本陣は手前隣の鈴木和夫氏宅。駒木野と小仏宿は相宿で、一か月のうち一日から十五日を小仏宿、十六日から晦日までを駒木野宿が継ぎ立てた。

高尾駅側の下り線のみ明治時代の甲武鉄道の煉瓦造り橋台が残っている。『小名路』近くに「金南寺」という寺院があるから、それから転じてこの名が出来たと言われている。

◇高尾駒木野庭園

昭和二年に開設された住居兼医院としての「小林病院」がこの四月から八王子市の日本庭園として開園したばかりでした。平屋の母屋は大正年間に築造されたもの、昭和初期に二階が

増築された本格的な日本家屋の周りは枯山水、露地や池泉回遊式の日本庭園が整備されています。道中ちよつとした寄り道でした。



◎小仏関所跡（国史跡）

甲斐・相模と境を接する小仏峠のあたりは戦国時代には北条氏の防衛線として重視され、尾根筋に「富士の関」が置かれて



者落合直亮なわあき・直澄なわすみ兄弟が出てい
 碑は彼らをたえたものである
 が、表の書は直亮なわあきの親戚、尾崎
 詔堂の筆。碑陰には明治の歌人・
 国文学者落合直文なわあき(直亮の養子)
 の高弟、与謝野寛(鉄幹)の歌「す
 がすがし関所の跡の松風にとこ
 しへ聞くは 大人(うし)たち
 のこゑ」が刻まれている。

いた。天正年間(1573～92)
 に麓の駒木野に移り、元和二年
 (1616)、現在地に移され、江戸
 時代には江戸防衛のための甲州
 街道の要所となった。関所の旧
 地は四百三十平米で、東西に木
 戸があり、元和九年(1693)以
 後は関所番四人が取締りにあ
 たった。いま街道の脇に当時の
 手つき石と手形石がある。ここ
 の関守落合家からは、幕末維新
 のおり倒幕運動に奔走した国学



◎念珠坂・五基の石碑

ここにはかつて高札場があった。又この辺りに一里塚(江戸
 より十三番目)があったようだ。



◎蛇滝茶屋

軒下に講札が張られた家。昔の蛇滝茶屋。これは高尾山の蛇
 滝信仰の講中がしたもので、江戸後期には「ふぢや新兵衛」と



いう旅籠だった。建物右手の蛇滝への道標には「上行講 是より蛇瀧まで八丁」と刻まれています。その先が猪の鼻。蛇滝への道がある。

『いのはな慰霊碑』蛇滝口上りバス停から北へ行く道の脇に「いのはな慰霊碑」の案内板がある。この道を上った先踏切の左に「湯の花（猪の鼻）トンネル」がある。

このトンネルで終戦真近に大事件がありました。慰霊碑はその事件で犠牲になられた方々の慰霊のために昭和二十五年に地元の青年団が建てたものです。

「湯の花（ハナ）トンネル列車銃撃空襲事件」

新宿発長野行の下り四一九列



車は、午前十時十分に新宿駅を出発する電気機関車ED16形1号機が牽引する8両編成であった。乗客は殆どが非戦闘員の一般乗客であった。

昭和二十年八月二日の八王子大空襲で不通となっていたが、この列車は八月五日に全面開通したこの日二本目の列車であり、また八王子駅で四一九列車の前の列車が

発車しなかったため大変な混雑だったとされていた。四一九列車は八王子駅が八王子空襲により焼失していたこと、単線区間での列車交換に手間取ったことなどの事情があり、浅川駅（現高尾駅）を一時遅れの午後〇時十五分に出発した。この時点ですでに空襲警報が発令中であっ





たが、さらなる遅延を回避するためや、湯の花トンネル（全長百六十二米）、小仏トンネルに入った方が安全と考えたため駅員や乗務員は発車させたものと思われる。その後、四一九列車は第一浅川橋梁を通過後、湯の花トンネル手前で、進行方向左側の太平洋側から飛来したアメリカ軍のP51戦闘機^{ムスタング}、複数機（二機か三機）に捕捉され、

機銃掃射と二十三糎ロケット弾の攻撃を受けた。ロケット弾は外れたが、機関車と一両目は特に激しく攻撃され、トンネルに二両目の半分程が入ったところで列車が停車した。トンネルから出ていた二両目半ばから最後尾八両目までが反復して機銃掃射に晒され、多数の犠牲者を出すこととなった。犠牲者の数は、国鉄の資料によると四十九名、警視庁資料五十二名、負傷者は警視庁百三十三名、国鉄重傷者百二十名、軽傷者八百名、と戦時体制下のためはつきりしない。この列車機銃掃射は、アメリカ軍列車銃撃による日本最大の犠牲者数になる。戦時下とはいえ、これは国際法にも違反する人道上許されぬ行為である。

◎小仏宿

おおしも
大下バス停付近から小仏宿となる。

問屋場一軒、旅籠十一軒、総家数五十八軒、人口二百五十二人（男百十六人、女百三十六人）、宿の長さ二十町四十七間。



甲州街道、武蔵国最後の宿場で、次宿の

小原まで一里二十二町。宿外れの青木民雄氏宅に「明治天皇



御小休所跡碑」がある。ここは小仏の名主、旅籠屋鈴木藤右衛門宅跡でもある。そしてその三軒ほど手前は青木清氏宅で、かつての甲州三度飛脚の定宿、三度屋であった。



◎寶珠寺

ほしゅじょう
小佛山寶珠寺。臨濟宗 南禪寺派。御本尊 釈迦如来。

寺宝 都天然記念物「小仏のカゴノキ」

開創年 永享元年（1429）頃、境内には不動明王坐像を祀る不動堂や落差5mほどの「不動の滝」のほか、甲州道中であることから江戸甲府三度飛脚常夜灯、馬頭観音石碑などがある。



◎小仏一里塚

車道終点の駐車場の先から林道になるがその辺りが江戸から十四番目の「小仏一里塚」らしい。



◇幅広い林道を暫く歩き、道幅が急に狭くなる。

ここから本格的な山登りの道になる。やや暗い林を抜けると小仏峠頂上に到着する。



◎小仏峠

戦国時代、武田信玄の家臣、小山田信茂が武州滝山城をせめたときにこの山道が使われ、江戸時代に入ってから峠道としての通行が盛んになる。戦国期までは峠の頂上に関所があったが、天正八年(1580)に駒木野に移った。峠に関所があったころは富士見関、富士の関とも呼ばれた。

『新編武蔵風土記稿』には「甲州武相の境にあり、峠の頂に小像の石地蔵あり、故に名とするならん、或は云この地の大日堂本尊もとの像は土中出现のものにて小像なりしかば、此地名おこりしといづれが是なりや、古記録によるに永禄十二年武田信玄小田原へ発向の時、此道



にかゝりたれば、古より開けたる大路なるべし」とある。

ここで昼食をとり、付近を散策して出発の準備をする。



小仏峠にて、第六回参加者記念撮影
立っている人、左から浅見、嶋崎、中島、八木、折本、伊藤、竹島
座っている人、左から宇山、中田、相原、前北



◇明治天皇小仏峠御小休所跡及御野立所碑をみて小仏峠を底沢に向けて出発する。
 途中、中峠茶屋跡を通り、美女谷への舗装道路を歩き、美女谷橋で小休止。



◎小原宿
 本陣一軒、脇本陣一軒、問屋一軒、旅籠七軒、総家数六十一軒、人口二百七十五人（男百五十一人、女百二十四人）、宿場の長さ

う側、ここに標識が建ててある。



◎底沢一里塚跡
 「照手姫伝説」の美女谷から底沢バス停に向かう途中に江戸より十五番目の「底沢一里塚跡」がある。実際は高速道路の向こ



二町三十間。

小原宿と与瀬宿の間は、約一八軒で、ともに片道継立ての宿である。上り（甲府方面）では、小原宿は小仏宿から来た人と荷を扱い、次の与瀬宿をとばして吉野宿へと継ぎたてた。下り（江戸方面）では、与瀬宿は吉野宿から小仏宿へ向かう人と荷を取扱い小原宿を



通り越して小仏宿へ継立てた。二宿で二宿分の機能を果たすのである。大名の通行は信州の高島・高遠・飯田の三藩にすぎず、常時の公用は幕府と甲府勤番・代官の連絡が主であった。小原宿はグラウンドまで。

◎小原宿本陣

小原宿の江戸からの入口にあたる東端に小原宿本陣がある。現清水家の先祖は後北条の家臣 清水隼人介で小原宿が設けられてからは名主・本陣を兼ねて



いた。江戸時代、現神奈川県





には東海道・甲州街道合わせて二十六軒の本陣があったが、現存しているのは小原宿の本陣だけである。

入母屋造りの建物(約三百平米)は平屋に見えるが、内部は四層造りになっており、養蚕と機織りも行っていた。大名専用の上段の間をはじめ、十四室の部屋が往時のまま残されている。



◇えんどう坂を下りて桂北小学校で20号線に突き当たるが、ここから与瀬宿となる。

第七回 実施日 平成二十四年五月十七日(木)

相模湖駅～上野原駅 約十一・二軒 累計 約七十二・八軒

宿 与瀬宿、吉野宿、関谷宿、上野原宿、

★集合場所・時刻 JR高尾駅2番ホーム 午前八時四十五分
高尾 901 〓 〓 9:11 相模湖駅

【行程・見どころ】

相模湖駅～与瀬宿本陣坂本家～慈眼寺～与瀬神社～貝塚の一里塚跡～吉野宿～藤野町～郷土資料館～吉野宿本陣跡～吉野橋廿三夜・念仏碑(小猿橋の説明板)～駐在所の向かい大きな榎(推定一里塚)～関野宿～増珠寺～境沢橋～をとめ坂～諏訪番所跡62
～船守寺～諏訪神社～疱瘡神社・円墳(江戸より18里の一里塚)
～上野原宿～(花井の番所)～新町二交差点～牛倉神社～本町三丁目バス停〓(バス)〓上野原駅
帰路 JR上野原1403の十五分遅れに乗る

◎与瀬宿

本陣一軒、問屋場一軒、旅籠六軒、総家数百十四軒
人口五百六十六人(男二百八十一人、女二百八十五人)、宿場の長さ六町五十間。

与瀬宿について『新編相模国風土記稿』には、「往時は愛甲郡

毛利荘に属し、与瀬村、江戸より十六里半、奥三保桂里と唱ふ、北条氏割拠の頃は石井家と守屋家が知行し、今は御料なり、江戸英毅支配せり、戸数百二十、東西二十七町、南北一里八町餘、甲州街道の一條東西に亘り、家相對し、並ぶこと八十八、与瀬宿と唱へて継場なり」とある。与瀬は、江戸時代一時期を除き、幕府の直轄領であった。

「小原」、「与瀬」、「吉野」の地名の起こり相模国に入ると、小原・与瀬・吉野という宿がある。これらの地名について「新編相模国風土記稿」には「蔵王社、別當金峯山慈眼寺、村中の鎮守なり、此の蔵王権現は大和国吉野より遷座せしむ、是れ故に山を金峯山と號し、且此の邊吉野・与瀬・小原などと云う地名も彼の地を模したるものなりと云う」とある。

およそ千二百年程前、天台宗の僧、隆弁の諸国遍歴の途中、この付近の風景が京都の八瀬・大原に似通うため、八瀬をとつて「与瀬」、大原をとつて「小原」の地名を付けた。

吉野宿の本陣を務める吉野家は弘安7年(1826)に大和から移つて、この辺りを開いた。鎮守の吉野神社も大和から勧請したものの、奈良本の浄光寺も吉野家が開いたものである。

◎与瀬宿本陣坂本家

「明治天皇與瀬御小休所跡碑」が立つ。が雑木、草むらの中、



本陣跡の門柱が残るのみ

◎慈眼寺

高野山真言宗 金峰山 慈眼寺は、天正年間頼源阿闍梨の創立によるもので、明治維新に至るまで蔵王権現の別当寺であった。明治五年神仏分祀の国令により唯仏寺となり現在に至っている。



◎与瀬神社

与瀬神社の祭神は日本武尊、創建は不明。吉野山の蔵王権現を勧請した古社で「与瀬の権現様」と呼ばれています。

「相模湖町史」から、与瀬神社は天和三年(1682)、町の下方相模川近くにあった蔵王権現を現在地に遷座したものという。現在の社殿地あたり一帯を「熊ノ沢」と呼んでいるように、もともと熊野権現が氏神で、熊野神社が鎮座していたところに、蔵王権現を祀ったのである。(中略)現在の拝殿のやや左側(西側)の位置に、熊野神社が祀られていたと考えられる。そして、この(蔵王権現)遷座に伴い、熊野神社を境内に小社として祀



り、熊野神社跡地に蔵王権現を祀ったものと考えられる。このように、元禄年間(1688~1705)には現在のような社殿が整ったと考えられる。「新編武蔵風土記稿」によれば、与瀬神社のことは 蔵王社 別当金峰山 慈眼寺 村中の鎮守なり(中略)社地は駅西爽壇(壇：高台で乾燥したところ)の地にあり、甲州街道に臨んで玄門を立つ、是より而上切石を敷て漸登

ること、五十余歩にして木華表を設く、是より而上二町許仁王門あり金峰山の額を掲ぐ、是より而上石燈を登ること九十三級地形僅に平坦あり、茲に本社を結構せり、幣殿・拝殿・瑞籬などを連ね丹靑絶^註(堦：塗る)修飾せり(中略)或去この蔵王権現は、大和国吉野より遷座せしむと、是故に山を金峰山と号し、且この邊に吉野・與瀬・小原という地名も彼地を模したるものと云ふ。(後略)

◎貝沢の一里塚跡

江戸(日本橋)より十六里の一里塚へは中央高速の下を中央線、国道20線が交差して、その狭い歩道から、山道に入り、貝沢橋を渡り、山中を暫く歩きやつとたどり着く。





貝沢の一里塚で暫く休憩、さらに先に進むとこちら側は住宅が多く開けている。やがて20号線と合流するが直ぐ旧道に入る。

えて月を拝み、悪霊を追い払うという。

秋葉神社近くの石碑、二十三夜の石碑がやたらと目立つようになってきた。月待行事とは、十五夜、十六夜、十九夜、二十二夜、二十三夜などの特定の月齢の夜、「講中」と称する仲間が集まり、飲食を共にしたあと、経などを唱



読み方も難しいこれは「くぐど」と言うそうだ。地図に出ている観福寺も立派なお寺のようだ。

甲州古道の標識も目立つ、ぐるぐると回されている錯覚に陥るが、街道らしい雰囲気はつかめる。吉野宿の高札場を過ぎる。

◎吉野宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠三軒、総家数百四軒、人口五百二十七人(男二百四十七人、女二百八十人)宿場の長さ三町二十間。

吉野宿は、上り(甲府方面)では、小原宿から来た人と荷を扱ひ、下り(江戸方面)では与瀬宿に継立てた。かつて「ふじや」という旅館だった藤野町郷土資料館の道の反対側に吉野宿の本陣であり問屋も兼ねていた吉野家がある。数軒先には脇本陣の船橋家がありその先二町半ほどで沢井川がある。



◎吉野宿本陣跡 説明板には

「此処 藤野町吉野二三八番地吉野家は江戸時代甲州街道 吉野



宿本陣・名主であり、現在でも屋号を『本陣』と呼びます。吉野家の由緒は弘安年間(1780~1789)に遡り、承久の乱(1221)のとき一族は天皇方に従い、宇治勢田で北条義時を討ったが、戦いに敗れ、故郷を去り、この地に住み着きました。

江戸時代に関東五街道制定と共に参勤交代の大名宿泊のため、街道宿駅名主の家を本陣と定め、道中奉行の統制のもと公用人馬の中継を行わせていた。江戸末期のこの本陣は、木造五階建の威容を誉り、明治十三年明治天皇行幸の際は行在所となり、陛下はこの二階で昼食をされたとのことでもあります。建物は明治二十九年暮の大火で焼失した。当時侍従であった神奈川県令の書と天皇御出達直後の写真が今も保存されています」とある。

◎小猿橋

吉野宿の西の外れに沢井川があり、「小猿橋」が架けられていた。現在の吉野橋の東詰にある説明板には「小猿橋は、現在の吉野橋よりやや南寄りにあり長さ十四間（約25m）幅二間（約3.6m）高さ五丈八尺（約25m）の欄干付の板橋でした。この橋は、山梨県大月市の猿橋と工法も形も同じで、その規模が少し小さいことから「小猿橋」と呼んだと言われております。元禄十一年（1698）の記録によれば、橋の周辺の地形・地質が悪く迂回路の場所がないため、掛替工事が非常に困難であった。その工費は江戸幕府の支出で行われ、額は四百両であった。



その後次第に工費は減り、文久二年（1862）には七拾両となり、徐々に幕府の支出はなくなっていく。地元では、人馬通行橋銭の徴収、宿場の貸座敷や旅籠の飯売下女からの刎（はね）銭（せん）等を財源として掛替工事を行っていた。その折、八王子千人隊、萩原頼母（はぎわらたのも）を組長とする一部が工事中の警備・木材搬出の指揮に当つ

たと言う。明治初年からは総て官費で行われるようになり、明治中頃には上流約500mの地点に「新猿橋」という木橋ができた。大正八年、道路法制定と共に甲州街道は国道八号線となり、昭和八年八月の吉野橋の完成に伴い小猿橋、新猿橋は消滅した。」とあります。

◎藤野の一里塚

江戸から十七里。現在その位置は不確定。藤野駅の手前、20号線と合流して約300m、駐在所の向かい側、大きな榎の立っているところらしい。





69km 手前にて昼食後、第七回参加者記念撮影

左から伊藤、嶋崎、宇山、前北、浅見、中島、八木、中田、折本、相原、竹島

◎ 関野宿

本陣 1 軒、脇本陣 1 軒、旅籠

3 軒、総家数 130 軒、人口

635 人（男 323 人、女 312

人）、宿場の長さ 1 町 16 間。

小宿であったが、相模西端の宿駅

で住民の数は吉野宿より多かつ

た。宿外れの境川を越すと甲斐

の国である。脇本陣・本陣と並

んでいて、ともに中村姓である。

本陣跡の前にある説明板には「延

宝 2 年（1674）に設定され、江戸

から 18 里の位置にあり、隣の吉野宿には 26 町、甲斐の国上

野原宿へは 24 町の位置がある。往時にはこの近辺は奥三保

とも桂里とも呼ばれており、関野宿は諏訪番所を 通り、甲

斐の国に通じる最後の宿場だっただけに大変重要視されていま

した。道幅は 2 間、民家が 相対して軒を並べ、本陣・脇本

陣を備えた宿場であったが、明治 21 年（1888）の火災、その

後 2 度の大火によって、本陣及び宿場の面影を残すほとんどの

建物が消失してしまいました。藤野町教育委員会 平成 3 年 3

月」とある。



◎増珠寺

曹洞宗龍洞山増珠寺。墓地にはこの関野出身で天保7年(1836)に大関となった力士 追手風喜太郎とその弟子で横綱となった雲童久吉の碑があり、追手風喜太郎についての説明板があります。



◎境沢橋

相模と甲州の境の境川に架かる橋。かつては、この橋より40mほど下流にあったという。『宿村大概帳』には「宿内字甲斐・相模境川有之、幅大概三間程、橋渡りなり」とあり、これより甲斐の国に入る。「をとめ坂」という急な坂を登ると「諏訪の番所跡」がある。



◎諏訪番所跡

相模と甲斐の国境に位置し、小仏の関所とともに旅人の取調べが厳しいことで知られていた。「上野原町誌」によると、諏訪番所は、武田氏が北条氏などからの防備のために設置したのが始まりだそうです。当初は諏訪神



社の下にあつたが、抜け道を通る者を防ぐため、宝永四年(1707)谷村藩秋元但馬守喬知支配のときに乙女坂の上に移設された。乙女坂の下にあつた茶屋も監視役だったという。移転時出された十二か条の定によると、番所は明六ツ時—暮六ツ時(午前六時頃—午後六時頃)の通行とするなど

とされている。一般に「入鉄砲の出入」と言われますが、諏訪番所での通行手形改めは、男は上り下り不用、女は江戸へ上がるだけで必要でした。正徳三年(1713)松平甲斐守預所のと き山内利勝が口留番に任じ、以後累代山内氏が勤務するようになった。扶持米は二十俵でした。



諏訪番所跡

一、名称 諏訪番所(甲斐二十四関の一) 境川番所・境川口留番所とも呼ぶ

一、所在地 上野原町諏訪木のはけ二十番地

・宝永四年(1707) 諏訪神社東より番所坂上に移転

一、土地 番所屋敷 一畝二十八歩 高二斗三升三合

前采場 下々畑二畝 高一斗二升一勺

一、建物 木造平屋建(四十・二五坪) 草葺

一、仕事 通行取り締りと物資出入り調べ

・高瀬舟取り締りと徴税(二割二分)

・鶴川「渡し場」取り締め

・通行手形改め

※但し小仏関所(駒木野)・男は上り下り不用 女は江戸へ入用、下り不用

・番所坂所在茶店よりの情報聴取・江戸へ男・女入用

※番所役人 番所定番九人 獄舎取締一人

一、閉止 明治二年 制度閉止となる

明治三年 山内国太郎「捕亡方心得」となり、時局不穩に付き番所従前通りと通告

明治四年 この年番所廃止となる

明治四年 役宅は山内国太郎所有となる

その後 明治十三年 明治天皇巡幸の折り御小休、お召替

え所となる

明治十七年
十八年

渡沢栄一の別荘となり飛鳥山へ、その後
小泉策太郎氏所有となり、以後不明

一、町内そ・花井口留番所（上野原）

の他番・椿口留番所（桐原）

・藤尾口留番所（西原）

上野原町教育委員会 とある。

番所は八間の中、三間半の役宅に冠木門と柵木・矢来が巡ら
され、土蔵・納屋・小屋などが付属していた。

◎諏訪神社

拝殿の扁額には「古郡神社」とあるが、鎌倉時代に武蔵七党
の一つ、横山氏の流れをくむ横山隆兼の三男忠重が古郡別当と
称し、この地に館を構えたことと関係があるかもしれない。



◎船守寺

上原山 船守寺は諏訪神社の隣にある。境内に「船守り弥三
郎の碑」がある。この碑は弥三郎の遺骨を伊東市川奈の蓮慶寺
から出生地のここ諏訪のこの地に分骨し祀った記念として建て
たもの。弥三郎は上野原の諏訪の出身で、故あってこの地を去
り伊豆伊東の川奈で漁師をしていましたが、弘長元年（1261）



五月十二日伊豆に流罪となり、伊東の「まな板岩」（伊東市富戸
の蓮着寺の五百米程南の鳥崎の海上にある）に置き去り（伊豆
法難）にされた日蓮を救い、弥三郎夫婦は罪人である日蓮を約
三十日間洞窟に匿い、手厚く世話をしました。



◎痲瘡神社・塚場の一里塚
 すべて赤色の痲瘡神社の裏
 にある円墳らしきものが一
 里塚。江戸から十八里。赤
 色は病気除け、魔除けの色。

◎花井の番所

花井口留番所。20号線と合流したところから東北へ二百米ほど行った佐野川への入口にあった。これは八王子から関場、和田峠、佐野川を通じて上野原に出る「佐野川往還」に備えるものであった。

◎牛倉神社

境内入口には社号標「牛倉神社」「幸燈明神」と銅製靖国鳥居が立っている。
 説明板によると



御祭神 保食神、建速須佐之男うげもちのかみ
 尊、天兒屋根命、武甕槌命、経津
 主命

由 緒・創立年月は詳しくはな
 いが、人皇三十四代舒明天皇二
 年(330)秋九月初めて祭事を営ん
 だと伝えられる。延喜式外の古社
 で日本風土記又和名抄(応和年間
 1621年源順著)に古郡の郷に幸
 燈明神と記載されている。

永禄九年十二月加藤丹後守景忠

が再興し、後、慶長・元和・正保・寛文年間に改築加修された。毎年9月4日から6日まで3日



間繰り広げられる牛倉神社の例大祭は郡内三大祭りとして知られ、各地区数十基の神輿や二台の山車が練り歩く勇壮なお祭りでもある。



◎上野原宿

本陣一軒 脇本陣二軒 旅籠二十軒 総家数百五十九軒
人口七百八十四人(男三百八十六人、女三百九十八人)
宿場の長さ六町十八間、甲州へ入って最初の宿である。本町の露地を入ると本陣、明治天皇行在所(藤田家)の門がある。門の両側に石垣と土塀があるが手入れはされていない。



◇本町三丁目まで歩き、そこからバスで上野原駅に行き、狭い道でのバスの転換に感心し、午後二時〇三分の高尾駅行に丁度ぎりぎりでの到着になる。

その中央線が十五分も遅れて、余裕で帰宅の途に付く。

第八回 実施日 平成二十四年(2012)六月二十一日(木)

上野原駅⇨バス⇨本町三丁目⇨犬目下宿バス停

約九・八六籽 累計 約八十二・六籽

宿 上野原宿、鶴川宿、野田尻宿、犬目宿

★集合場所・時刻 JR高尾駅二番線階段下 午前八時五十分

高尾9:01 大月行き⇨9:20上野原9:26⇨バス⇨9:36本町3丁目

【第八回甲州道中行程】

上野原駅⇨バス⇨本町三丁目⇨木食白道上人加持水井碑⇨鶴川の渡し⇨鶴川宿⇨問屋場若松屋⇨本陣富田家⇨鶴川神社⇨大柵一里塚跡⇨吾妻神社・大柵観音堂⇨長峰砦跡碑⇨野田尻宿⇨明治天皇御小休所址碑(本陣跡)⇨お玉ヶ井碑⇨西光寺⇨荻野の一里塚跡⇨西ノ原古墳⇨矢坪坂の古戦場跡⇨武甕槌神社⇨座頭転ばし⇨新田宿(米山家)⇨下宿バス停⇨バス⇨四方津駅

◇本町三丁目から小雨が降る中、一行十一名が旧道へと入り、歩き始めると直ぐに木食白道上人加持水井碑が民家の庭先に現れる。

◎木食白道上人

「木食」とは、穀物を断ち、山にこもる修行のことである。高



野山の僧、応其(1536～1608)が形態を整えたとされる。

一般に「木食上人」というと木食行道上人きじょうじょうが有名であるが、江戸時代には多くの木食上人がいた。その一人、白道は甲州上荻原わはら上原(現塩山市内)に生まれた。姓は小野。六歳のとき、法幢院ほうどういんにて剃髪し、父とともに廻国納経の旅に出る。安永二年(1773)に行道と伊豆で出会って、安永六年74に山形で再開。以後行道に師事し

て、行をともしながら廻国し、十年、信州長久保にて行道と別れて生地に帰り、その後は関東一円を勧進する。「加持水井」を彫ったのは寛政九年(1797)。行道とともに廻国していたときに彫仏を始め、郡内地方を巡って多くの仏像を刻んできた。

文化元年(1804)には鳥沢に



移って、約二十年間「上人屋敷」と呼ばれる草庵で暮らし、即身仏になるため入定したという言葉伝えもあるが、甲州市内の法幢院には文政八年(1825)に七十一歳で病死という記録(過去帳)も残っている。なお、現在大月市内の円福寺境内にある無縫塔は、白道が過ごした上人屋敷から移築されたものといわれている。

◇旧道の分岐点が分かりにくいと、坂を下る途中、南南西のあなたに見える八つ沢発電所を指差し中島さんの説明が入る。

以下、東京電力株式会社のホームページより、当社の「八つ



沢発電所施設」(水力、山梨県大月市・上野原市)は、本日(平成十七年十二月二十七日)、文部科学大臣より、国の重要文化財として指定(注1)されました。八つ沢発電所は、相模川水系の桂川の水を利用した、日本で初めての大規模な調整池式(注2)

発電所で、当社の前身である東京電灯株式会社(注3)が建設したものです。建設当時は、水力発電所として東洋一の規模を誇り、明治四十五年に営業運転を開始して以来、約一世紀近くが経過した現在も稼働しております。この発電所は、川の上流に小さな堤(取水口)をつくって水を取り入れ、長い水路で落差が得られるところまで水を導き、そこから下流に落ちる力で発電する方法(水路式)を採用しています。今回、重要文化財に指定されたものは、取水口施設、隧道、水路橋(谷間などに水路を渡すための橋)、調整池をはじめとする合計二十箇所の発電所関連施設と土地で、約十四軒の範囲におよび、わが国の重要文化財の中で最大規模となります。重要文化財の指定にあたっては、明治後期の水力発電所建設の黎明期における大規模な水力発電所関連施設が水系全体として残っていることに加え、当時の鉄筋コンクリート構造の水路橋としては国内最大級の径間(橋脚の間隔)を実現した第1号水路橋や、ダムの高さとしては国内最大であった大野調整池堰堤など、複数の構造物に高度な土木建設技術が発揮されていることなどが評価されました。当社の施設が国の重要文化財に指定されたことは大変名誉なことであり、当社としては、建設以来約1世紀近くを経た現在も電力を供給し続ける貴重な施設を、今後も維持、保存しながら、大切に利用していきたいと考えています。

◇旧甲州街道は色々なところで分断されているので、複雑に絡む道路の歩道橋をわたり、舗装道路を横断してあぜ道を歩く状態になる。



街道は、途中遠方に見えるオレンジの建物の後ろ側に繋がっているという。

◎鶴川の渡し

甲州街道で唯一人足による川越しの場所であった。現在の鶴川橋のやや下流辺りであったといわれている。この辺の標高は約二百米。



◎鶴川宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠八軒、総家数五十七軒、人口二百九十五人（男百五十一人、女百四十四人）、宿場の長さ二町三十間



右側の川端家（柏屋）はかつての脇本陣、左側の加藤氏宅は問屋で、いまも隣の宿までの賃金・駄賃を定めた「高札」を四枚保管している。その先百米進んだ左手の富田家がかつての本陣で、街道はその手前を左に登る。



◎鶴川神社

鳥居と本殿は離れている。一行は鳥居をみて街道沿いに本殿に向かう。境内には民家から馬を繋ぐ石を移設して、「駒つなぎ



◎大柵おおくぬき一里塚跡

新しい標識には、一里塚の説明と上野原地域の一里塚は甲州

地元人から犬目までの道筋を告げられ、何処から来たか。



石」として残されている。また、近隣の人が誇りに思っている彫刻がある。中を覗いてみると山車のような物がみえる。

神社を出ると、

街道に沿って四箇所の一里塚が作られ、大柵の一里塚は江戸から十九番九里にあたります。現在その後は残されていませんが、鶴川宿から大柵部落に入る手前の道の両側にあつたことが



江戸時代の絵図等から分かります。平成十八年三月 上野原市教育委員会と。

ここで小休止、自衛隊のヘリコプター五機の編隊に遭遇して歩を進める。

◇途中こんな常夜灯と道案内を見て、小雨ぱらつく中、今回の歩きの中、中島さんが見つけた唯一屋根のある休憩所へと向かう。

◎吾妻神社・大柵観音堂

吾妻神社の祭神は弟橘姫おとたちばなひめで、境内には寛政十二年(1800)の二十三夜塔、安永六年(1777)の常夜灯、ほか数基の石造物がある。神社の下には不動院行満寺の廃跡に建つ大柵観音堂があり、大日如来と千手観音の二体が祀られている。甲斐国志に「百姓持ち本尊二体・大日如来・千手観音、左右に百番観音」と記されている。

◇時間的には少し早いが大柵観音堂で昼食タイム、本尊の大日



如来坐像と千手観音菩薩坐像様方には申し訳ないが廻りに座らせて貰い、軒先を拝借して、時折、降り注ぐ雨を避ける。

階段を登り、神社本殿をお参りして、中島さんからシャワーベット状のデザートも配られる。記念写真を撮り、雨脚が速く





大柵観音堂前にて、第八回参加者記念撮影
 後列（伊藤、八木、相原、折本、三浦、宇山）
 前列（中島、前北、中田、竹島、嶋崎）

なった所で出発する。

旧甲州街道脇を中央高速道が平行に走っている。談合坂パーキングエリアまで一軒の標識が確認される。



◎長峰砦跡碑

説明板によると、『長峰』とは鳶ヶ崎（鶴川集落の上）から矢坪（大目地区矢坪）に至るまでの峰を指す呼び名ですが、戦国時代に上野原の加藤丹後守が、その出城と言うべき砦をここに築いたことから、

いつかこの付近だけを『長峰』と呼ぶようになりました」とある。説明板には、また、「中央自動車道の建設に先立ち調査が行





われ、調査の結果、戦国時代末の長峰砦に結びつくと考えられるものに、山地を整形して設けられた郭(くるわ)(見張り小屋などを置く平坦地)の跡、尾根を切断する堀(堀切)の跡、斜面を横に走る横堀の跡などがあり、とくに堀跡からは鉄砲の玉

が出土したことなど、いくつもの成果が得られています。また長峰と呼ばれるものになった尾根状地形のやや下がった位置に尾根筋を縫うように幅一米余りの道路の跡が断続的に確認されました。これは江戸期の『甲州街道(正式には甲州道中)』に相当すると見られるものであります」とある。



◎野田尻宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠九軒、総家数百十八軒
人口六百七人
(男三百十三人、女二百九十四人)
宿場の長さ五町

野田尻宿は正徳三年(1713)、集落起立の形態で宿を構成したが、明治十九年(1886)の大火で昔の家はほとんどなくなった。宿の西はずれ、「明治天皇御小休所址碑」の立っている場所が本陣跡。



◎お玉ヶ井碑・西光寺

お玉ヶ井の碑 説明板には、次のような話が記されている。
「昔、恵比寿屋という旅籠に大変美しい女中・お玉がいた。彼女は長峰の池に住む竜神と恋仲になり、夜な夜な出掛けていたの



だが、宿の主人にとがめられると突然姿を消した。すると宿の前に置いた手桶から澄んだ水がこんこんと湧き出した。何とお玉の正体は竜であったという。長峰の池の主「竜神」と結ばれたのである。念願の恋が実ったお礼に水不足に悩む野田尻の人のため、宿の一角に水を湧き出させたのだった。」

西光寺は天長元年(824)に真言宗として創立したが、鎌倉時代に臨済宗となった。本尊は虚空蔵菩薩。境内にある井戸は山岡鉄舟が使ったという。

◎荻野一里塚跡

指定 昭和四十七年三月二十二日 旧上野原町指定

所在地 上野原市野田尻一〇二八番地

この一里塚は、江戸時代、甲州街道に一里(約四キロメートル)ごとに築かれた塚の一つです。江戸日本橋から二十番二十里にあたり、甲斐国(山梨県)に入って三番目の一里塚です。

一里塚の標柱が現在地から東に約十メートルの県道脇に建てられています。この付近の街道両側に一里塚があったと言われています。古老の話によると、北側の塚の上に「ヒラマツ」と呼ばれた老松がありました。一里塚は、旅人が、もう一里、



もう一里と距離を知りながら旅をしたり、塚の木陰でひと休みをする場所でした。また、人夫や馬を借りる時の駄賃を決める基準にもなり、明治三十四年(1901)、中央線が開通するまでおおいに利用されました。地域の歴史を知る貴重な文化財ですので大切に保護しましょう。

平成二十三年九月 上野原市教育委員会

◇西ノ原古墳

この古墳は、平成十一年三月、土地所有者の大神田氏が畑の耕作中に、地下約五十糎で発見しました。

むすびやうたにこゑなきしほしほし
無袖型横穴式石室で、古墳の主体部にあたる施設です。

ふんきやう
墳丘及び石室の天井・側壁はすでに失われ、石室の基底部がころうじて残されていました。造営時期は、七世紀代と推定されますが、副葬品がないため詳細は不明です。当時の古墳は、複数造営されて一群を形成する傾向があるため、さらに数基程度の古墳が近隣で発見される可能性があります。

本古墳の埋葬者は不明ですが、当地が甲斐と武蔵・相模を結ぶ交通上の要衝に位置することから、この利点に立地した有力者一族と推定できます。上野原町周辺で古墳の石室が確認できた例は少なく、当時の社会や文化を知る史跡として高く評価でき



きます。石室の規模は、全長三・三米、最大幅一・七米、奥壁高零〇・八米です。出入口は南東を向いていました。平面形は側壁にふくらみを持たせた胴張り形で、西関東で数多く見つかっている後期古墳の一類型です。

平成十三年三月三十日

上野原町教育委員会

◎矢坪坂の古戦場跡

矢坪の集落から山道になるが、その登り口に大乗妙典日本廻国供養塔と「矢坪坂の古戦場跡」の案内板がある。

説明板には、「長峰の古道を西に進み



大目地区矢坪に出で、さらに坂を上ると新田に出る。この矢坪と新田の間の坂を『矢坪坂』と言い、昔戦場となったところである。享祿三年(1530)四月二十三日相模国の北条氏綱の軍勢が甲斐に攻め込み『矢坪坂』に進んだ。一方、小山田越中守の手勢が坂の上で待ちかまえ、両者は坂をはさんで対峙し、

やがて激戦が展開

された。同所一带は南西に切り立った崖と北面に山腹を臨み道が入り組んでいる要害の地である。この戦いは多勢に無勢、ついに小山田勢は敗退となり、富士吉田方面に逃げた。現在、つわものどもが夢の跡をしのぶ影もない。ただ、たまに矢じりなどが掘り出されることがあったと



いう。また付近に五輪塔四基、宝篋印塔一基があるが、この戦の關係のものかどうかは定かでない。上野原町教育委員会」とある。

◇武甕槌神社

武甕槌命を祀った神社。武甕槌命の「武」は武勇を表し、「甕槌」は御雷（みかづち）の意で、文字通り「神鳴り」に比せられる猛々しさを表す。武勇・戦勝・勝運の神としての信仰のほか、その業績から開拓・平和外交の神としても崇められている。



この矢坪坂は標高五百米ほどの山道を「座頭転ばし」など険しい所を通り、新田宿へと抜ける。

◎座頭転ばし

『甲駿道中記』には「箭壺坂一名座頭転と云う。坂上に村落あり。蛇木新田と云う。坂下は箭壺村なり。路殊に嶮巖し。中にも巨岩の突出たる下に路屈曲て、底ひも知られぬ谷に臨める所あり。昔盲人こゝを過り、後れたる盲人、先だちし盲人と相喚び、路の曲折たるもしらず其声の随に直進まんとし、失脚して谷底に転墜て死けるゆゑに座頭転と云とぞ」とある。



◇新田宿（米山家）

正式な宿ではないが犬目宿の脇宿として近郷の有力者に依頼した事例ではないかと思う。

「尾張の殿様が定宿としたいわれ」が玄関先に貼ってあった。



大名行列は参勤交代制度によるもので、諸大名の妻子は人質として常に江戸に住まわせた。甲州街道を毎回利用したのは信州（長野県）の高遠の殿様だけであったが、名古屋から西の大名は、行列の宿泊が他の大名と重ならないよう、調整するため甲州街道も利用された。米山家では、一時期尾張の殿様が泊まる定宿だったこともあり、それを示す象嵌ぞうがんの札

はすばらしく、行列は早朝の富士山を遙拝して出立しました。尾張の殿様は、徳川御三家でも筆頭の大名であったので、尾張の殿様が宿泊している間はそれを示す札（将棋の駒型で黒漆の象嵌で表に「踏馬」裏に「御免」と書いてある）を門にかけ、三つ葉葵の紋所の高張り提灯がたてられて門番が立ち、いかなる格の高い武士でも馬に乗ったまま通ることは不敬となるため許されず、馬から下りて馬を引いて歩いてとやらなければなりません。大名行列では、宿場で常備している人馬では足りないので、近郷から「助郷役」と称する賦役が課せられ、その負担は重いものであった。葵御紋の尾州と書かれた標札は馬の荷駄などに付けられたものです。

大名行列は、宿場の入り口から毛槍を振りながら「したにーしたに」と威儀を正して通り、宿場から出るまで行った。宿場は遠くから見通しが出来ないように入り口の道路は曲げて作られていた。下の県道30号線（上野原・大月線）は、明治天皇が馬車でご巡幸するために造られた道であり、「新道」と呼ばれています。

◇新田部落を出るとやや太い道の県道30号線に合流する。犬目宿入口の標識が見える。犬目下宿のバス停で丁度良いバスに恵まれ、四方津駅まで乗る。

旅立ちは、誰もが歌で「お江戸日本橋、七つ立ち・・・高輪夜明けて、提灯消す」と唄われているように非常に早く、七つ時とは今での午前四〜五時に出立して、宿泊する宿には明るい内に宿に着くようにしていました。日の出の富士山は赤富士で、やがて白く輝く富士に変わる光景





第九回 実施日 平成二十四年(2012)七月十九日(木)

四方津駅⇨バス⇨犬目バス停⇨猿橋駅

約九・四軒 累計約九十一・七軒

宿 犬目宿、下鳥沢宿・上鳥沢宿、猿橋宿

★集合場所・時刻 JR高尾二番線階段下 午前八時五十分

高尾9:01 大月行⇨ 9:32 四方津9:47⇨バス⇨ 10:10 犬目

【第九回甲州道中行程】

四方津駅⇨バス⇨犬目下宿バス停⇨犬目の兵助の墓⇨犬目宿
案内板・本宿跡⇨白馬不動尊⇨恋塚一里塚⇨石畳の道⇨上鳥沢
宿本陣跡⇨明治天皇駐蹕地碑⇨用水路⇨精進場(水垢離場)⇨

猿橋⇨猿橋駅

帰路 JR猿橋発 中央特快 15:23 三分遅れ。

◎犬目の兵助の墓

えびき坂を登り切る少し手前、左側の墓所には天保騒動の首謀者の一人、犬目の兵助の墓があり、宿の中央左側には「犬目兵助の生家跡」の標識が立っている。



※犬目の兵助

天保四年(1833)の飢饉に続いて、天保七年(1836)も春から天候不順の雨続きで、再び飢饉がやってきて、食糧不足に郡内(山梨県の富士吉田市、都留市、大月市、南都留郡、北都留郡の地域を指す)の人々を悩まし、草の根、木の皮までも食べ尽くす有様であった。餓死者は日を追って増加した。救済方を代官



所に願ひ出たり、國中（郡内を除く甲州）からのコメの移送を訴えたが、埒があかず、犬目の兵助と下和田（大月市）の武七を頭取とした郡内人は結集して、笹子峠を越えて、熊野堂（春日井町）の小川奥右衛門を襲撃した。世に言う甲州一揆である。この時点で一揆側にはならず者も加わり、甲州騒動の様相に発展したので、郡内側は引き上げてきた。しかし、当局の追及はきびしく、武七は自首するが、兵助は逃亡の旅に出た。兵助は妻の「里ん」に罪が及ぶのを防ぐために離縁状を出し、長い間逃亡生活を続け、その間の日記」を残している。

知らない土地で、苦難を続けての旅であり、しかも逃亡という特異な旅である。故郷に残した妻子の夢も記され、一泊の礼にそろばんや文字を教え、開平（平方根）や開立（立方根）を解くそろばんまで教えている。暖かい季節には野宿もした。

その後、木更津に隠れ住み、老いてから犬目に帰ってきた。兵助の遺品である旅日記と離縁状が、兵助の生家である、水田屋（奈良尚文氏）に保管されている。

◎犬目宿

本陣二軒、旅籠十五軒、総家数五十六軒
 人口二百五十五人（男百二十五人、女百三十人）、
 宿場の長さ五町二十六間



正徳二年（1712）、現在の集落より約六百米下方の斜面（元土橋）にあった部落がそのまま移動し、その翌年に宿場となった。宿の右側、「明治天皇御小休所址の碑」の辺りが脇本陣だった「笹

「屋」で上条家。少し先の左手「甲州街道犬目宿案内板」の立っている辺りが本陣跡。道の突き当りで宿は終わる。この辺の標高は約五百二十米。鶴川から三百二十米以上登って来たことになる。

◇兵助の生家

その説明板に寄ると

義民「犬目の兵助」の生家

天保四年（一八三三）の飢饉から立ち直ることができないのに、天保七年（一八三六）の大飢饉がやって来ました。

その年は春からの天候不順に加え、台風の襲来などにより、穀物はほとんど実らず、餓死者が続出する悲惨な状況となりました。



兵助の生家



各村の代表者は救済を代官所に願い出ても・開き届けてもらえず、米穀商に穀借りの交渉をしても効きめはないので、犬目村の兵助と下和田村（大月市）の武七を頭取とした一団が、熊野堂村（東山梨郡春日居町）の米穀商、小川奥右衛門に対して実力行使に出ました。

称して「甲州一揆」と言われています。

このときの兵助は四十歳で、妻や幼児を残して参加しましたが、この一揆の首謀者は、当然死罪です。家族に類が及ぶのを防ぐための「書き置き的事」や、妻への『離縁状』などが、この生家である「水田屋」に残されています。

一揆後、兵助は逃亡の旅に出ますが、その「逃亡日誌」を見ると、埼玉の秩父に向かい、巡礼姿になって長野を経由して、新潟から日本海側を西に向かい、瀬戸内に出て、広島から山口県の岩国までも足を伸ばし、四国に渡り、更に伊勢を経ています。人々の善意の宿や、野宿を重ねた一年余の苦しい旅のようすが伺えます。

晩年は、こっそり犬目村に帰り、役人の目を逃れて隠れ住み、慶応三年に七十一歳で没しています。

平成十一年十一月吉日

上野原町教育委員会

◇犬目バス停を過ぎると街道は直ぐ右に曲がる。そこからの見晴らしも良く富士山が眼先に飛び込む。寶勝寺を過ぎて街道を



暫く行くと白馬不動尊の鳥居が見える。その鳥居の奥に不動滝があると言う。一行はその滝を見ようと山道に入る。

◎白馬不動尊

天平九年(737)、諸国にハシカが流行った際、時の天皇(聖武)が神の啓示を仰いだところ、犬目の里の白馬不動尊を祈願せよとのことだった。そこで名僧行基をつかわせた。行基が滝に打たれ祈願した満願の二十一日目に白馬不動尊が示現、諸国の病が平癒したという。

(注)『続日本紀 卷第十二』によると、天平九年八月十三日、

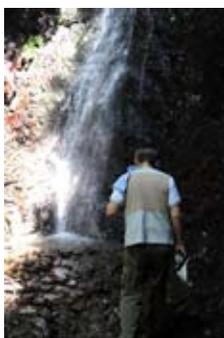


が実に多く、百官の人たちも死亡で欠けてしまったものが少ない。まことに朕の不徳によってこの災厄を生じたのである。

(中略)そこで人民に免税の優遇措置をとり、生活の安定を得させたい。天下の今年の田租、および人民が多年にわ



たり背負っている公私の出挙すいこの稲を免除せよ。(中略)諸国にあつて風雨を起すことが



聖武天皇は次のように詔したと記載されている。

「朕は天下に君主として…(中略)。またこの春以来災厄の気がしきりに発生し、天下の人民で死亡するもの

でき、国家のために効験ある神々で、まだ幣帛なぐさの頒布に預かっていないものを、すべて奉幣の例に入れよ。(後略)が、行基云々については不明。

◇県道から外れて旧道に入る。不動滝からも標識を確認した君恋温泉の君恋の宿がある。道は県道よりはるか高い所を辿るので見晴らしも良い。暫く歩くとまた県道30号の街道に出る。



◎恋塚一里塚

江戸日本橋から二十一里。道の左側だけが山梨県で唯一、一里塚の形態が残されている。恋塚というのは「日本武尊」にまつわる地名で、昔東国征伐の帰途にあった尊が、海神の生贄なまけとなった弟橘姫おとたちばなを偲んで思いに沈んだことに由来する。



山梨県指定史跡 恋塚一里塚 指定 平成十四年七月四日
所在地 上野原市犬目二二五三番地 八

この一里塚は、江戸時代、甲州街道に一里(約四キロメートル)ごとに築かれた塚の一つで、江戸日本橋から二十一番二十一里にあたります。

塚は原形を良く残しており、直径約十二メートル、高さ約五メートルの円丘です。昔は街道を挟んで北側にも塚がありました。

もともと付近は峰続きでしたが、旧街道を作る時に堀割りにしたため、道の両側に小高い場所ができました。この地形を利用して一里塚が築かれたものと考えられています。一里塚は、旅人が、もう一里、もう一里と距離を知りながら旅をしたり、塚の木陰でひと休みをする場所でした。また、人夫や馬を借り

る時の駄賃を決める基準にもなり、明治三十四年（一九〇二）、中央線が開通するまでおおいに利用されました。

平成十八年、大雨によって塚の西側斜面が崩れたため復旧工事を行いました。地域の歴史を知る貴重な文化財ですので大切に保護しましょう。

平成二十三年九月 山梨県教育委員会

上野原市教育委員会

◎石畳の道

「山神社」の先右手に上りになった小径を進むと馬宿だった家があり、その先に甲州街道では珍しい江戸時代の「石畳の道」が当時のまま五十〜六十米ほど残っている。

◇古くから踏み固められた、すべりそうな石が並んでいる。



◇中央高速道の下を潜り、20号線に出て八十七杆の標識を確認すると、街道から奥まった所の福地八幡神社に到着する。



途中で正午の時報を聞いたので十五分ほど遅れたようだ。中島リーダーが事前に調べてくれた本日の昼食場所である。





境内の好きな場所に各人が陣取り昼食を食べる。

食後、中島さんがパイナップル缶詰を冷凍したものとシャーベット状のシロップを一緒に分配してくれる。暑いときは、これがなんともいえないには最高のデザートです。

分配用のお皿は何時もの紙からアルミに変わっていた。

恒例の参加者記念写真を撮り、三十分ほど費やし歩き始める。



福地八幡神社にて、第九回参加者記念撮影
左より（前北、伊藤、中島、竹島、三浦、嶋崎、宇山、八木、相原、折本）

◇福地八幡神社（旧指定村社）

御祭神

誉田別命（応神天皇） 神功皇后 武内宿禰

例祭日 九月一日

由緒沿革

創建は寛平年間（八八九）と云う。当初扇ヶ峰に鎮座し扇社と弥した、長元七年（一〇三五）現地に遷座し福地八幡社と改めたが、天文十七年（一五四九）九月吉日と刻す当社の神劍は、北都留郡小西郷大木大明神為御劍於駒橋元近作之とあり、更に享保三年（一七一九）神階正一位贈られたおりも大木大明神とある。慶応四年（一八六九）の社記に神領式畝歩、社地堅三十六間、横二十九間の規模を有したと見える。

明治維新後に現社名に復し指定村社となる。

御神徳

古代にあつて大陸と交渉し、日本文化の興隆を囿られた御神徳が信仰の対象である。又応神天皇は神助皇后の御子で母子の關係にあり、古い日本の母子神（ははこがみ）信仰の中心の神とされた。八幡神は母が子をしっかりと抱いて、慈悲をもってこれを大事に育てる大愛を本願としている。

為に、家内安全、除災招福、子孫繁栄の御神徳が殊の外顕著である。

◎下鳥沢宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠十一軒、総家数百四十四軒

人口路六百九十九人（男三百六十四人、女三百三十五人）、

宿場の長さ四町三十間

下鳥沢と上鳥沢は合宿で、『宿村大概帳』によると「上十五日は上鳥沢宿、下十五日は下鳥沢宿に代り合宿勤来」と半月ずつ交代で宿を行っていた。屋根や庇が大きくせりだし、宿場を思わせる町並みが続いている。下鳥沢宿は明治三十九年の大火で焼失したため、現在残っているのはそれ以後の建物である。

◎上鳥沢の一里塚標柱

江戸から二十二里。『宿村大概帳』で「木立榎 但、右之塚計上鳥沢宿地内」とあり、『分間延絵図』に左右が描かれている。

◇今回の街道歩きではこの一里塚標柱が確認できず、残念であった。

◎上鳥沢宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠十三軒、総家数百五十一軒

人口六百五十人（男三百三十三人、女三百十七人）、

宿場の長さ六町十七間

鳥沢駅辺りから上鳥沢宿が始まる。

◎上鳥沢宿本陣跡

右手セブンイレブンの先に明治天皇駐蹕地碑が立っていると
ころが本陣跡。蹕とは「さきばらい」のことなので、駐蹕とは「さ



きばらいを泊めた」ことで、明治天皇の行幸の碑ではめずらしい。

◎用水路

駒橋発電所で利用した水を下流にある上野原八ツ沢地区の発電所で有効利用するために造られた延長十四軒の用水路。八ツ沢発電所は、JR上野原から大月へ行く中央線の最初のトンネルの上にある揚水式発電所。猿橋の下流にある用水架橋は「八ツ沢発電所施設第1号水路橋」で国の重要文化財。

◇これが見えるのは鳥沢駅を過ぎて小向地区辺りで20号線を反

◎精進場

れて旧道に入り、民家の先で行き止まり状態の草むらを下りると20号線に出る。さらに少し下ると脈々と流れる用水路が見える。



宮谷人口から街道を外れて下りてゆくとそこにも用水路が見える。さらに桂川まで下りると富士山詣での禊場となった所を見ることが出来る。

◇20号線まで戻り、猿橋に向かう。天候が変わり、雨模様となる。



あつという間にどしゃ降り、軒先を借りて暫し雨宿り、小降りのタイミングで移動する。

◎猿橋

猿橋は、富士五湖のひとつ山中湖を水源とする桂川が富士の溶岩流上を流れ、その浸食作用によって深い渓谷をなしていて、

その上に架設された橋で、橋上を旧甲州街道が通っていたので、古くから旅人によって有名となった。

江戸の文人、鴨鳳郷が「橋梁ノ奇ナル者、周防ノ算橋、岐岨ノ懸橋、峽ノ猿橋、是レノミ」と紹介して以来、「周防の錦帯橋・木曾の棧橋」・「甲斐の猿橋」は三奇橋として人々に知られている。「宿村大概帳」には「桂川通宇猿橋―高欄附刎橋、板橋、長拾七間、横吉丈吉尺。刎橋にて水際迄凡三拾尋程有之。橋下に樹木生茂り、此所の景地なり」とある。

安藤広重も天保十二年に「甲陽猿橋図」という猿橋の絵を残している。

この橋は推古天皇の二十年(613)、百済の帰化人志羅呼、別名芝耆磨が樹の梢を伝い桂川を越える猿に設計のヒントを得て架橋した、という伝説があり、実際にいつ頃架けられたについ





ては不明である。

橋の構造については室町時代の記録に載っている。三十米に近い両岸絶壁の溪谷に橋脚をかけることは、当時の工法ではできず、また吊橋には距離が長すぎるので、両岸から太い芻木を三列四段に上層へ行くほど長く突き出して埋め込み、芻木と芻木のあいだには横に枕木を入れて支え、最上層の芻木に橋柵をかけわたし、その上に全長三十一米、幅五米で一米ほどの高欄をつけた木造反り橋で、肘木桁式橋という珍しい工法で架けられている。水面からの高さは約二十三米。橋のたもとの茶店大黒屋に忠治蕎麦という名がみえるように国定忠治がこの橋から飛び込み、追手の役人から逃れた話は、実際には鳥沢の衆という博徒だったようだ。

猿橋は甲斐武田家防衛戦の場所でもあった。応永三十三年

(1496)、武田退治と称して鎌倉公方足利持氏が甲斐を攻めた折には、猿橋で激しい攻防が繰り広げられた。

◎猿橋宿

猿橋から出た国道20号線のここから猿橋宿になる。

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠十軒、総家数百三十八軒

人口五百四十二人(男二百六十七人、女二百七十五人)、

宿場の長さ三町三十四間

◇猿橋では雨降る中の散策で、一行の移動を阻止する豪雨となる。時折雷様に怒鳴られるのでガソリンスタンドで暫し呆然とする。近くの大月行のバス停まで移動するとやや小降りになる。あと半里の駅までをバスに乗ると街道歩きの欠落がでる。





でもこの雨では、と迷うが竹島さん、中島さんの決断で歩き始める。途中、乗ろうと思った空の大月行バスに追い越されて、猿橋駅の曲がり角の91・7の標識を見る。外も中もビシヨ濡れの衣類を、駅のホームで着替えて中央特快1523に乗る。



第十回 実施日 平成二十四年(2012)八月十七日(金)
猿橋駅～初狩駅 約九・三軒 累計約百・七軒
宿 駒橋宿、大月宿、下花咲宿・上花咲宿、下初狩宿
★集合場所・時刻 JR高尾駅三番線階段下 午前七時四十五分
高尾 8:02 小淵沢行 〓 8:42 猿橋

【第十回甲州道中行程】

猿橋駅～阿弥陀寺・一里塚跡～送水管・駒橋発電所～美しい滝～第五甲州街道踏切～駒橋宿～厄王大権現～三島神社～大月宿～明治天皇御召喚所址・脇本陣跡～大月橋～下花咲の一里塚跡～下花咲宿本陣(星野家)～上花咲宿本陣～丸山の一里塚～96第七甲州街道踏切～聖護院道興歌碑～下初狩宿本陣～初狩駅 帰路 初狩14:22立川行

◇三嶋大明神

秋雲の中、20号線の歩道橋をわたるとすぐ神社の境内にはいる。ここで本日の街道歩きの祈願をする。



◎阿弥陀寺・一里塚跡

猿橋駅から20号線を左折し約百米、急カーブの角に「殿上の一里塚（江戸から二十三番目）」の標柱があり、その横に「彈誓上人舊跡の碑」が立っている。

彈誓上人（タンセイ、タンゼイ）は天文二十一年（1552）尾張国海辺の里に生まれ、九歳のときに出家した。美濃国塚尾の観音堂



に百日坐を立たず参籠し、次に武儀郡の山奥に庵を結び念仏三昧をする。二十余年の修行をつんだ後に諸国行脚に出て、苦行修練を重ねた。

そして、佐渡島の檀特山に於いて木喰草衣もくじくそうえの身となり、ついに生身の阿弥陀仏を拝し、他力念仏の深義を授かる。その後、信濃国、相模国で法益をすすめ、慶長十四年（1609）、最終修行の地古知谷

に入って岩穴に住いし念仏三昧の日々を送り、一寺を建立し如法念仏の道場とした。

四年後の慶長十八年（1613）、本堂脇に岩窟を修行中の僧たちに頼み掘らせ、石棺の真下に掘ってある二重の石龕せきがんに生きながら入り、即身仏となった。六十二才。

彈誓上人に関連した寺院等

■阿育王山阿弥陀寺（浄土宗）

箱根町塔之澤にあるアジサイで有名な寺で皇女和宮ゆかりの寺

■無常山一之澤院淨発願寺 天台宗彈誓派総本山（伊勢原市日向）

大山から日向薬師へ下る道の右側にあり、五重塔のある寺。

■光明山法医院阿弥陀寺（京都市左京区大原古知平町古知谷

阿弥陀寺八三）僧彈誓が全国行脚の末慶長十四年（1609）に創建。

如法念仏の道場。彈誓上人は慶長十八年（1613）五月二十三日、

本堂脇の巖窟で即身仏となる。遺骸は石棺に納め本堂 横の

石廟せまうに安置されている。



◎送水管・駒橋発電所

駒橋発電所は、東京電燈（現東京電力）初の水力発電所。発電所門前の記念碑の碑文には「明治四十年十二月二十日 十六時 送電開始 日本最初の遠距離送電を行った水力発電所である。」

昭和三十九年三月一日建之」とある。

日本で最初の水力発電所は、京都・蹴上の琵琶湖疏水を利用した「蹴上発電所」（明治二十四年竣工）でした。明治十五年、銀座にアーク灯が灯って以来、増



加する電力需要をまかなうため、東京電燈によつて東京近郊に火力発電所が増設されていたが、日露戦争などの影響による産業政策で石炭が慢性的に不足して

いた。そのため東京電燈は、水力発電による東京への長距離送電を計画、駒橋発電所を明治三十九年一月に着工、明治四十年（1907）十二月竣工、出力一万五千ワットで、東京（早稲田変電所）までの七十六軒を五十五キロボルトの特別高压線で送電を開始し、麻布、麴町一帯に灯をつけた。有効落差は百三米。水路は桂川五軒上流の川茂ダムから始まり、禾生下流で桂川の支流朝日川を七連アーチで煉瓦造りの落合水路橋（九鬼山から杉山新道を下ったところにある煉瓦の水路橋）で渡り、菊花山等の山々はトンネルで、ほぼ水平に発電所上部の水槽まで続く。なお、駒橋発電所で使用した水は十四軒の水路で猿橋の「八沢発電所第一号水路橋」、四方津の北の大野調整池を通つて八沢発電所へいく。

◎美しい滝

送水管の先、Y字の道を甲州街道は左へ行くが右百五十米で左に名もない美しい滝がある。



Y字を左に行くと「第五甲州街道踏切」がある。この道が甲州街道の本通りであったことが判る。



◎駒橋宿

旅籠四軒、総家数八十五軒
人口二百六十七人（男百二十八人、女百三十九人）
宿場の長さ十町五十四間

この宿は本陣も脇本陣ももたないが、人馬の継立は猿橋と大月に日割りすることもなく、完全に行われていた。



◎厄王山神社（厄王大権現）

宿の南の標高七百三十米の猿橋御前山は地元では厄王山と呼ばれ、厄王権現の祠がある。この神社は 里宮か。なお、上野原から猿橋まで桂川沿いに五つの御前山がある。

東から「鶴島御前山」、「四方津御前山」、「綱之上御前山」、「斧

窪御前山、「猿橋御前山」。



◇この厄王山神社で小休止、遅れた嶋崎さんが一行を追い抜き
大月市民会館近くに居ると竹島
さんに連絡が入る。



◎三島神社

駒橋宿・大月宿の産土神うぶすま(生まれた土地を守る神)で祭神は
大山祇尊、鬼面石が祀られているという。この神社の境内には
かつて「大槻」と呼ばれる四本のおおきな槻ゆきキがあり、その名か
ら「大月」の地名が生まれたといわれている。大槻は囲四十三
尺、四十五尺、四十七尺など樹齢一千二百年以上の巨樹だった

が、安政五年(1857)、万延元年(1860)、明治七年(1874)、昭
和三十年(1955)と次々に枯れ、いまはその記念碑が立ってい
るのみ。



神社の裏の光明寺の閻魔堂には運慶作の閻魔像がある。また
菊花石もある。

◎岩殿山

標高六百三十四米、頂上の南側直下は鐘岩と呼ばれる礫岩が
露出した約百五十米の高さの崖。山頂からは富士山が望め、山
梨百名山、秀麗富嶽十二景にも選定されている。武田信玄の時代、
郡内の領主・小山田氏の信茂までの三代の居城であった。

天正十年(1582)に織田軍が甲斐に侵攻、武田勝頼は再興を



大月市役所の先
左手、「明治天皇御

富士急上大月駅の南、無辺寺の西にあつたが、宿駅を設定するにあたって移転したといわれている。

田信長により不忠という理由で処刑された。小山田信茂の首塚は初狩の先の唐沢橋の瑞竜寺跡にある。勝頼と夫人と勝頼の嫡男信勝の墓は田野の景德院にある。



図らんと三月三日新府城を出発、郡内の岩殿城を目指したが、小山田信茂の離反により笹子峠で止められた。仕方なく勝頼一行は天目山（栖雲寺あたりか）を目指し、その麓、田野の地で最後の戦いを挑んだが敗れ自害、名門甲斐源氏の武田氏は滅亡した。郡内での戦乱を避け領民を救うため武田氏に離反した小山田信茂であつたが、後に織

◇大月市民会館近くで嶋崎さんと合流。いまは飲み屋街道と変化した旧甲州街道を歩く。立派な看板をつけた有力特約店の前で懺悔の記念写真。



◎大月宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠二軒、総家数九十二軒
人口三百七十三人（男百七十一人、女二百二人）、宿場の長さ四町

江戸時代に「谷村路」あるいは「富士道」と呼ばれた道は、大月宿を起点としていた。もともと駒橋村と同村であつた大月村は、寛文九年（1669）、領主秋元氏による見地のときに分村。

元来の集落は今の

召喚所址」の記念碑の辺りが脇本陣、向かい側少し先に問屋場が、その裏に本陣があった。その先、富士急線の上を渡った大月橋の手前が「富士道」との分岐・追分である。現在、広場に道標



や馬頭観音が集められ、津島牛頭天王社が祀られている。

◎大月橋

江戸時代の橋は高欄付の板橋であった。『宿村大概帳』によると「長三十四間 横老間四尺 橋杭四組立」であり、現在の新大月橋の北の明治の橋の更に北側、大月東中学校裏の権兵衛坂と呼ばれる坂道を下ったところに架けられていた。

◎下花咲の一里塚跡

江戸日本橋から二十四里。南側だけが原形をとどめている。塚の左に天保十三年(1840)に立てられた芭蕉の句碑があり、「しばらくは花の上なる月夜哉」と読める。その他多くの石造物がある。



◎下花咲宿

本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠二十二軒、総家数七十七軒
人口三百七十四人(男二百二人、女百七十二人)、
宿場の長さ四町十六間

上花咲宿との合わせ宿で、本陣は月の前半まで上の井上家が、月の後半は下の星野家が勤めていた。

◎下花咲宿本陣（星野家）

星野家は江戸時代、代々名主を務めた家柄で、本陣・庄屋・問屋場を勤め、農業経営も手広く、養蚕・織物・酒造・金融な



どを営み、郡内屈指の旧家である。敷地は約五百坪で家の建坪は百五十坪、どっしりとした古い大黒柱、また三万点以上といわれる古文書が保存されている。元禄期以降のものが多く、特に天保七年（明治二十三年（1836～1890））までの日記は貴重なものである。また、宿場間の運送賃を定めた高札などが土間に所狭しと並べられている。

一階は宿としての機能を果たし、二階、三階は養蚕の設備がある。江戸時代の大名や幕府の役人が泊まり、また明治十三年



星野家にて第十回参加者記念撮影
後列（相原、三浦、折本、竹島、八木）
前列（宇山、伊藤、中田、前北、中島、嶋崎）



(1880)、明治天皇が行幸の際に休憩された奥の間や控の間などが当時のまま残されている。
 ◇今回この資料館を見る目的で定例の第三木曜日を避けたり、混雑を避けてガストに入る万全の事前調査に感謝する。



◎上花咲宿・上花咲宿本陣跡
 本陣一軒、脇本陣二軒、旅籠十三軒、総家数七十一軒
 人口三百四人(男百五十人、女百五十四人)
 宿場の長さ四町十一間

本陣は井上秀雄氏宅で、西方寺入口バス停近くにある。『宿村大概帳』には「凡建坪六拾參坪門構・玄関共無之」とあるが、昔の面影を残しているのは庭だけである。

「花咲」という宿の名の由来について『甲駿道中之記』には「上下二站(駅)の間、花折と云地に古時桜の大木あり。枝葉繁茂て花咲ける時は行旅も木陰に憩息^{いそぎ}て、枝を折て頭挿^{かぶ}などせしゆえに此名あり。村名も又これにより起れりと云ふ」とある。



◎丸山の一里塚

権現山は「丸山」とも呼ばれていて、花咲の一里塚から一里の距離にあるので、塚はないが、「丸山の一里塚」と呼ばれている。

麓に「寛延四年(1751)」及び「嘉永七年(1834)銘のあるものなど七基の馬頭観音、そのほか巡拜塔二基が祀られている。『国志草稿』の下初狩の項には「駅ノ東二里塚アリ、丸山ト称ス」とある。

また、「分限延絵図」には笹子川の北側に「古一里塚」とのみ記されている。



◎聖護院道興歌碑

道興(永享二年1430~大永七年1527)は関白近衛房嗣(在職1445~1447)の子で室町時代の僧侶で聖護院門跡。幼少の頃から出家し、聖護院門跡となり、その後園城寺の長吏、熊野三山、新熊野社の検校も兼ねた後に大僧正に任じられ准后²となった。門跡とは皇族・貴族が住職を務める特定の寺院、あるいはその住職のことである。

准后²とは、太皇太后、皇太后、皇后の三后に准ずるという意味を持つ皇族・貴族の称号。后の字があらわれていることから、女性、とりわ



た後は「道興准后」と称されるようになった。

文明十八年(1486)から翌文明十九年(1487)には聖護院末寺の掌握を目的に東国を廻国した。

文明十八年六月に京都を発つと、若狭国から越前国、加賀国、能登国、越中国、越後国の北国を経て、下総国、上総国、安房国、相模国の関東を廻り、翌文明十九年五月には武蔵国から甲斐国を廻り、奥州まで至っている。

道興は後に東国廻国を紀行文『廻国雑記』として著している。この歌碑には「今はとてかすみを分けて帰るさにおぼつかなしや初雁の里」という『廻国雑記』にある歌が刻まれている。文

け皇族の夫人の称号ととらえられがちであるが、実際には性別に関わらず貴人に授けられた。准后は経済的に優遇する目的で天皇の夫人、皇族、公卿、将軍家、高僧に与えられ、三后に準じた年官、年爵、封戸を賜った。

化三年(1806)の造立で森山其進³の筆。

歌碑には、道興が初狩を通りかかったときに詠んだ歌が刻まれており、森山其進が『甲斐国志』の編纂事業着手後まもなく、三百年以上も前に初狩を訪れた道興を顕彰するために建てたもの。石材は柱状節理で六角に割れた溶岩(安山岩)、高川山から産出したものと考えられ、高さは百三十八糎で、台石の上三十糎ほどで折れている。

道興は、大善寺(第十二回甲州道中で訪れる予定)に宿泊した折も、歌を詠んでいる。

◎下初狩宿・下初狩宿本陣

本陣二軒、脇本陣二軒、旅籠十二軒、総家数百五十六軒

人口六百十六人(男三百八人、女三百六人)

宿場の長さ七町

下初狩宿中ほどの右手、国道20号線より一段低いところに旧本陣の奥脇氏宅がある。同家は慶応年間(1865-68)の初めに建てられたものでありながら、いまでもよく保存されている。

左手には門も残る。道に面して「山本周五郎生誕之地の碑」

3 文化2年(1805)、幕府の命により『甲斐国志』の編纂が始まり、その都留郡を担当する編纂員となったのが谷村に住んでいた森山其進である。



が立つ。本陣の斜め向かいには、脇本陣跡、大野氏宅。問屋業務はここで十六日から晦日まで担当し、一日から十五日までは中初狩が担当していた。

「初狩」の名の由来は、『甲駿道中之記』に「土人の説に、鎌倉の右大将が富士野に大獵せられし時、東北の方は此辺より狩はじめられし由て、此処を初狩といへり」とある。

第十一回 実施日 平成二十四年(2012)九月二十日(木)

初狩駅〜新田下バス停〜笹子駅

約十一・二軒 累計約百九・二軒

宿 中初狩宿、白野宿、阿弥陀海道宿、黒野田宿

★集合場所・時刻 JR高尾四番線階段下 午前七時四十五分

高尾発 802(甲府行) ≡ 8:55 初狩着

【第十一回甲州道中行程】

初狩駅～宮川橋の一目富士～中初狩宿本陣～小山田信茂の首塚～船石橋・御舟石所在地・白野宿～本陣（今泉家）～一里塚跡～毒蛇濟度旧跡・親鸞上人念仏塚～稲村神社～葦ヶ池跡～阿弥陀海道宿～阿弥陀堂跡～笹一酒造～笹子駅～笠懸地藏～黒野田宿本陣跡～普明院・一里塚跡～中橋～新田下バス停～笹子駅
帰路 新田下（バス）14:06 笹子駅前 笹子15:37（立川行）

◎宮川橋の一目富士

宮川橋の南、遙か山あいに富士山が見える。この辺りは谷間で山が近いので、富士はほとんど見えないが、ここでは富士が見えるので「宮川橋の一目富士」とかつての旅人に評判だったという。



◎中初狩宿・中初狩宿本陣

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠二十五軒、総家数百八軒
人口四百五十九人（男二百二十八人、女二百三十一人）、
宿場の長さ十町四十四間
下初狩宿との合宿であった。軒を張り出した昔風の家が建つ

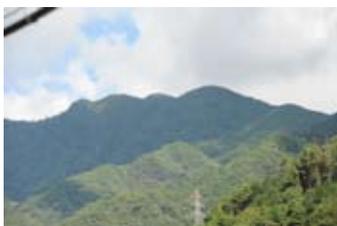


ている。町並みの西、道の右側に「明治天皇御小休遺跡」の石標が立っている家が本陣だった小林茂氏宅である。『宿村大概帳』に「凡建坪六拾六坪門構にて玄閑無之」とあり、今も緩勾配切妻二階建ての景観を残している。



◎小山田信茂の首塚

唐沢橋の辺りにかつて臨済宗の「瑞竜寺」があった。瑞竜寺跡には「小山田信茂の首塚」と称する供養塔がある。信茂が、織田信長によって甲府善光寺で斬罪された後、その首を従僕が持ち帰り、瑞竜寺の住職がここに葬ったという。



◎船石橋・御舟石所在地

橋を渡った先左側に石碑があり、「御舟石所在地」とある。船石とは船を繋ぐ石で、ここが川湊で 船溜まりがあったと云われている。また、「昔この辺りに船の形をした大きな石があったが、明治四十年の大水害で埋没した。この石には、親鸞上人が初狩を通ったとき御舟石の上で説法を行い、また、老婆に名号を求められてこの石の上で布に書いて与えた」という伝説がある。



◇街道に戻り歩き始める。日差しは強いが日影は涼しく、気持ちよい季節に変わっている。滝子山を見ながら20号線を進むとやがて船石橋を渡る。

◇初狩駅から約三軒の地点で中央線のガードを潜り、中央高速道路と挟まれた地点に白野一里塚跡の標識が見られた。



◎白野宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠四軒、総家数八十四軒

人口三百十八人(男百四十九人、女百六十九人)、

宿場の長さ五町十二間

白野・阿弥陀海道・黒野田は上初狩が三村に分村したものである。一日〜十五日が黒野田宿、十六日〜二十二日が阿弥陀海道宿、二十三日〜三十日は白野宿と三宿で問屋業務を分担していた。脇本陣は宿の西はずれ左手の天野家、その先右手奥の今泉正弘氏宅が本陣であった。

◎白野の一里塚

白野宿の中央右手の火の見櫓の奥にある秋葉山・山の神・金毘羅・白山権現・天織姫の五つの祠と文化三年(800)の二十三夜塔を祀つてあるところには一里塚があったという。



◎立石坂の立石

甲州街道は白野宿の先、小さな橋を渡つてすぐ右に入るが、かつては斜め右の道を進んで「立石」のさきで線路を横切つて立石坂を通つて吉久保に入る道であった。その「立石」の前の説明板には「昔日長途の旅をして来た山姥が二本の杖をついて歩いて来たが、途中一本折れたので立石坂に突き刺し残した杖が立石である。その片方の一本は岩殿の麓川隣の桑畑の中に西方を向いて立っている。これを鬼の杖と言ひ伝えている。立石



坂の立石は高八尺七寸、下部中三尺、上部中二尺六寸、厚さ九寸の自然石である」とある。

◎親鸞上人念仏塚・毒蛇濟度旧跡

親鸞上人念仏塚の説明板には、

去る程にこの前方の低地が昔時、甲斐沼地としられた葦ヶ池となりしと伝へる。

其の池の總面積は最大時は三丁歩余り葦ヶ窪郷の四分の一をしめてるとの説も伝へられる。

鎌倉時代、西暦一二二五年代浄土真宗の開祖親鸞上人が甲州等々力の積舎萬福寺に参詣の帰路、此地の地頭、北面の武士、小侯左衛門尉重澄宅に立ち寄りしところ葦ヶ池にまつわる毒蛇濟度の祈願をこんせい（懇請）される。葦ヶ窪の地頭小侯左衛

門尉重澄には「よし」なる娘有り、たまたま京より来りし半僧修行僧、晋挺 奈良興福寺法性宗の高僧行基が造った、阿弥陀海の阿弥陀堂にこもりて 断食修業中その晋挺に心をよせしが僧業の身には女性のその意を深く説得され其の意の通ぜらるを嘆き悲しみこの池に投身若き生涯を果てしときく。

地頭のこん願に依り上人供養三七二十一日間小石に大字の名号を墨書きし、池中に投入するや、「よし」の霊は成仏濟度



され池中に異様な轟き有りて「よし」の霊は觀世音大士の姿となり、上人の池中に投入れた、小石が白虎を帯びて先達となり郷人の驚き騒ぐ中、東南の空高く消え去りて遠く、伊豆の手石浜に落ちしと伝へる。今も手石浜の阿弥陀「くつ」には、参詣の人の絶え間なしときく。池には葦草が群れ、低地なる故に葦

ケ窪の地名起源と伝えられる。

葦ヶ窪の地頭小俣左衛門尉重澄は後に、親鸞上人の徳を慕って出家僧行を積僧唯念と称し真木善福寺一世開山となる。又此の時期、太布乃名号で知られる、龍泉寺 寺の下の作太郎も上人の徳を慕って僧業し、永讚坊乗信として、真木福正寺三世住職となる。両寺共教行信證浄土真宗なり 合掌」とある。

毒蛇濟度旧跡は、親鸞が毒蛇を成仏させた話が元になっている。

広重の『甲州道中記』に「昔此処に小俣左衛門といふ大百姓あり。娘およしは至て美女なれども、心あしく、けんどん邪見にてついに蛇身となる。其頃此辺に大沼あり。よなよな出て里人をなやます。親鸞上人来り給ひて、これを教化し給ひしより此憂止みしとなり」とある。

また『甲斐国史』には「昔、吉という娘が旅の僧に恋をしたが、叶えられず葦ヶ窪に投身し、毒蛇と化して人々を苦しめた。そこに立ち寄った親鸞上人は六万四千八百八十四個の小石に南無阿弥陀仏の名号を書き、池に投じたところ毒蛇は濟度成仏した。その後池は枯れ、名号石も多くの人に持ち去られ、しばしば災禍にあうようになったので、名号石を取り戻し、塚を立てて安置した」とある。

今も真木の善福寺に名号石が残る。

◎稲村神社

吉久保の集落に入ると右手に稲村神社があり、神社の角は滝子山への登山道入口である。



神社境内には不思議な男女合体の道祖神が祀られている。また、そのほかにも寛政二年(1799)の常夜灯一对、文化二年(1805)の二十三夜塔、馬頭観音十八基がある。

◇稲村神社を出て、前述の滝子山への案内図が掲載されている。暫く進むと、この先、行き止まりの看板が眼に入るがさらに進むと中央線の線路に阻まれてやはり通れない。

正しい親切な看板であった。看板付近まで戻り中央線ガード

を潜る手前に葦ヶ池跡の碑を見る。



◎葦ヶ池跡

娘が蛇となつて住みついたという葦ヶ池。

「沼湖 葦ヶ池

跡」の碑があり、横の説明板には

「往古、此の地を葦ヶ窪郷、池を葦ヶ池と稱せりと伝へる此の池の創造の時期については詳でないが、古代



期洪積三世紀、其の後沖積世期原平台地が沖積層扇状地高地として形成された時期、昔篠子川と言い現在笹子川の本流が流出した土石流に遮断され、低地に泥土と湛水によつて沼湖となつたと古記に述べられてゐる。

此の池の總面積は五丁歩有餘で池の中には葦草の群生が池面の多くを占めてゐたとの説有り池の名稱の因けりともいう。

(後略)とある。

吉久保の集落を甲州街道は直進し坂を下る。現在は中央線で切られているが、線路の先に街道の跡が残っている。

◇その線路脇の街道跡を辿り、反対側から、先程の遮断されたところを確認して、20号線を目指す、踏切があつてもおかしくはない道である。



◇途中から道は太くなり、アケビが鈴なりの家があり、三つ葉五つ葉があると聞く。20号線に出て笹子橋の旧道を歩く。

橋を渡ると、本日の昼食予定、笹一酒造の建物が見える。その前に阿弥陀堂跡を先に見るため小高い丘を登る。



◎阿弥陀海道宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠四軒、総家数六十五軒
人口二百七十二人（男百二十七人、女百四十五人）、
宿場の長さ四町二十八間

ここは昔「よし窪」と呼んでいたが、宿の南に阿弥陀堂があったため、宿の名前も阿弥陀海道となったという。現在は「道」の字がない大月市阿弥陀海。「海」一字で「かいどう」と読ませている集落である。阿弥陀堂の跡といわれる草むらの中には「本阿弥陀仏」と刻まれた碑が残っている。

古くは民家が笹子川沿いにあったが、享保十三年（1728）の大雨による洪水で一軒残らず流出。その後南岸に移動した。

◎阿弥陀堂、阿弥陀海

説明板によると

「阿弥陀堂」「阿弥陀海」の由来

此の地は人皇第三十六代、皇極（孝徳の間違いか）天皇の大化の御代、名僧





行基菩薩が天下の深山幽谷を尋ねて入峽され、笹子峠に蟠居（蟠踞の間違いか）する盜賊、野獸を、お慈悲を以て平げ鎮めん」と、當地に滞在され、自ら、阿弥陀如来の像を彫られ、御堂を建て、鎮座。祭祀、数旬の供養を○されて、平定。

庶民の安穩を計られた所と言わる。因に此の御堂に通ずる道を阿弥陀街道と言ひ、此の地に住む○○の心、広かれと願つて此の聚落を「阿弥陀海」と命名された由である。とある。

なお、「阿弥陀海の由緒」の石碑には

此の地は人皇第四十四代（西暦七百二十年頃）元正天皇の養老の御代、時の名僧、行基菩薩が天下の深山幽谷を尋ねて入峽され……（後略）とある。

（注）文中○は判読不能の文字です。



阿弥陀堂跡にて第十一回参加者記念撮影
後列・立ち人（相原、宇山、中田、折本、八木、竹島）
前列・座り人（嶋崎、中島、伊藤、前北、三浦）



◇今回は弁当は用意せず、笹一酒造の食堂を利用する旨と事前
にメール連絡を頂く。各人が好きなものを食べて、食後は外の
ベンチで、ゆっくりと休憩して、デザートに吟醸酒粕のアイス
クリームの押し売りがあったり、中島さんからは冷凍巨峰が振
舞われたり、豪華な昼食になった。



◎紅富士太鼓道場の世界一の太太鼓

猿橋にある紅富士太鼓道場の太鼓でギネスブック登録の世界
一の太太鼓。名称は「世界平和太鼓」。太鼓口径 十五尺八寸(四
米八十糎)、胴全長 十六尺三寸(四米九十五糎)



◇十二時五十分に街道歩きを開始。太太鼓と分かれて20号線を
進む。

◎黒野田宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠十四軒、総家数七十九軒
人口三百三十四人(男百七十人、女百六十四人)、
宿場の長さ四町

黒野田宿は笹子峠の麓の宿場で、江戸から諏訪に向かう参勤

交代のときにはここに泊まることが多かった。本陣は天野啓吾氏宅。向かって右に門があり、屋根の軒瓦には本陣の守が付けられている。



の者を頭に立ちつくす、小作りの珍形石造地蔵が在る。之を黒埜宿、笠懸地蔵と呼ぶ。しかし其の由来に就ては今も詳ならず。

創建は安政二年（1855）卯五月、十三代將軍徳川家定の天領政治時代と刻字が有る。此の地蔵創建の根源を考証するとき、遠くは天明、百姓一揆を農史にとどめた天保の大飢饉、徳川天領時代の七公三民の重税、領民の生活は農作物不作に依る餓死、心中、乞食、その窮乏は後絶たず、領民を襲ってくる苦汁に満ちた諸業を善しかれと地蔵に心願して来たものである。今は只、笠懸地蔵として伝へる術しか有り得ない。」とある。

◎笠懸地蔵

大飢饉や、「七公三民」の重圧、農作物の不作による餓死・心中などの領民に襲ってくる苦しみを心願して、安政二年（1855）に創建されたものである。

説明板によると

「甲州街道 黒埜宿笠懸地蔵 由来
往古より此の街道の路傍に分厚い笠様



◇本陣、笠懸地蔵をすぎるとやがて道は二股に分かれる旧道の黒野田橋を渡りきると道路向こうに一里塚跡の標識が見える。

◎普明院・一里塚跡

普明院は山号を黒埜山といい、臨済宗妙心寺派の寺院。
門前に一里塚の標柱が立っている。江戸日本橋から二十五里。



◇予定の見所はここで終るが、まだ目的のバス停まで歩き続ける。
百七、百八軒の標識を通り、緩やかな坂を登りつめる。



20号線と分かれて県道212号線に入る。次回の矢立の杉の標識を確認して笹子新田下のバス停に到着する。中島さんから本日
の歩行距離は十一・七軒と聞く。午後二時六分のバスを待ち笹子
駅に戻る。日本橋から下諏訪まで予定の半分を踏破できた。

付録 犬目の兵助のこと

甲州一揆（郡内一揆）

天明三年（1823）から度々の飢饉にあり、高い年貢や地代に苦しめられた郡内農民に、追い打ちをかけるように天保の大飢饉がやって来たのでした。天保四年の凶作による飢饉から立ち直ることが出来ないのに、天保七年（1836）がやって来たのでした。この年は春から天候不順の雨続きの低温で不作となり、しかも八月十三日には暴風の強い打ちがあり、米麦はもとより、こぬか、ふすま、更に種子まで食べ尽くし、草の根木の皮に至るまでも食い、餓死者は日に増してゆき、その上伝染病まで流行して悲惨の極に達し、頼みの綱である繭や織物の値段は下落したのでした。村役人などは救済方を代官所などに掛、出たが、聞きいれてもみならず、幕府をはじめとした当時の政治は、こうした零細農民の救済に對しては冷淡であったのでした。無論、穀物の買い占めや他国への移出は禁止しただろうが、実効はなかったようであり、その元凶は、郡内に米を送る商人である熊野堂村（春日居町）の小川奥右衛門（熊奥）と言うことになり、矛先が向けられたのでした。下和田村（大月市）の武七（七十三才）、犬目村（上野原町）の兵助（四十才）が頭領となり、大槻村の八右衛門などを加えて、郡内四十二ヶ村の困窮農民は、綿密な計画を練り実力行動に出たのでした。

八月二十日、白野宿（大月市初狩）に集結して、翌二十一日笹子峠を越えたのです。（この時の人数は百二十二人と色々な説があるが、二百三百ぐらいだったでしょう）

兵助たちの目的は、熊奥さんらの米煮商からの借り受けること（穀借り）と、郡内に対して米を売る約束を取り付けることだったのです。ところが、峠を越えたあたりから情勢は一変したのです。初鹿野村の長、

百姓、義右衛門を頭取とした村人、更に日影村などの人数が合流して、駒飼宿の三軒の米屋を打ちこわし、鶴瀬の番所を押し通り、勝沼に入り、鍵屋庄兵衛の家などの炊き出しを受けていた頃から、國中東部の民衆や無頼の徒が加わり、暴徒と化して、翌二十二日に熊野堂村に向い、小川奥右衛門を襲ったのでした。兵助たち郡内勢はこの時点で、もはや初期の目的達成は無理であると考えて、郡内へ引き上げたのでした。（これをまでを一揆と言い、以後を騒動と呼んでいる）

残った暴徒は、相州無宿吉五郎が頭取として、長浜村無宿民五郎、江尻窪村の周吉などが先頭に立って打ち壊しを続け、更に暴徒はその数万人も言われる程に膨れ上がり、石和から甲府へと甲州全域に広がるに及んで、幕府は、甲府勤番所、石和代官所の力だけでは押えきれないと見て、諏訪藩、沼津藩にも出兵させて鎮圧したのでした。（打ち壊したの三百十九軒）この一揆による逮捕者一千百名、処罰者は、武七などの磔四名、死罪十名、を含めて五百六十二名に達しました。しかし、百十七名は牢死しています。

郡内に引き上げて来たものの、一揆への参加者に対する探索はきびしく、たぶん武七あたりから「お前はまだ若いから逃げろ」とでも言われたのでしよう、兵助は逃亡の旅に出発したのでした。（武七は谷村代官所に自首して、後、牢死している）

※ 兵助は一揆（八月二十日）に出発する前の八月十五日の日付で「書置之事」として財産処分のことと、生後六ヶ月の娘「たき」に水田屋を継がせることを、本家と組の人に依頼する文をしたため、十七日の日付で、妻の「里ん」に離縁状を出した理由などを、組の人々宛に書きのこし、三下り半の離縁状もしたため一揆に加わったのでした、このとき、妻の里ん三十九才、女の子「たき」は、その年の二月四日生まれの乳児だったので、家族に罪の類がおよぶのを防ぐ万端の覚悟だった

のが伺われます。

「書置きの事」には、日雇いに行くからと言ったが「里ん」は反対して、言うことをきかないので離縁するとまでとりつくるっていますしかも、これらの文書は、里んの実家である四方津村牧野組の庄屋、平兵衛の子孫である佐藤高歩氏宅で発見されているのです。

と言うことは、「書置きの事」の宛名は犬目村の名家や組の人々に宛てたものです、けれども、一揆の首謀者は成功、不成功に拘らず、死を免れることは出来ません、代官所からの呼び出しは、まず「里ん」に來ますし、平兵衛にも來ます、そのときの弁明には、離縁状も書置きの事也需要です、ですから、「里ん」や「たき」のことを思い、義兄の平兵衛と相談して残していったのでしよう。事実、平兵衛は後に、犬目村の人々と秋山村や相模の方面の知り合いを尋ね探したが、兵助は見付からなかつたむねを報告しています。

離縁状之事

一、里んと申女周助殿世話を以て女房に貫受
相統罷有候へ共此度我等心意不相叶義に付
小兒相添離別致然る候上は何方に縁付候共
一言の申し分御無離縁状如件

八月

犬目村

四方津村

兵助

お里ん殿

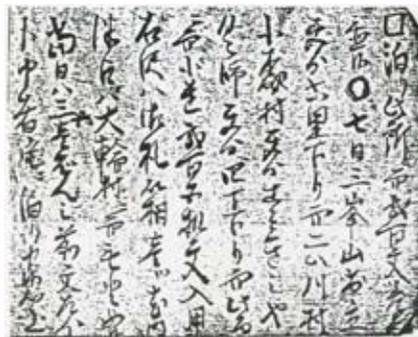
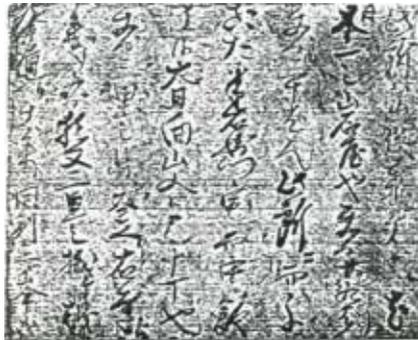
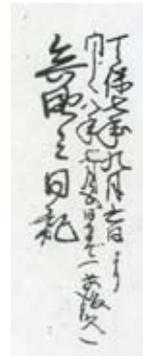
※里んと申す女を周助殿の世話(仲人)で女房に貰ったが、この度私の心に合わないので、子供も添えて離縁致しますが、今後どなたに縁付こうとも一言の申し分も言いません、離縁状かくのごとし

八月 四方津村

お里ん殿

犬目村

兵助



このように用意周到な処置をして(里んの兄、平兵衛とも談合承知の上である)一揆に加わり、一揆から一旦戻って、役人の裏をかくように北への道をたどって逃走するのです。

(兵助が逃亡の旅に出た後である)が、兵助の刑は磔死になっている)

(深谷克己著「八右南門・兵助・伴助」参照)

吉岡梅男

甲州街道を歩く【上】

(日本橋から黒野田宿)

参考文献

揺籃社 大高利一郎著「街道を歩く 甲州街道」、人文社「江戸東京散歩」、山川出版社「東京都の歴史散歩」、くにたち中央図書館「くにたちしらべ NO. 6 谷保天満宮」、仏教辞典、講談社「堀 和久著 大久保長安」、山川出版社「神奈川県歴史散歩(下)」、山川出版社「山梨県の歴史散歩」、EY パパが歩く甲州道中地図、講談社「続日本紀(上) 全現代語訳 宇治谷孟著」、吉川弘文館 山口徹著「歴史の旅甲州街道を歩く」

寿会多摩支部ハイキングサークル

企画・竹島久雄

事前調査、案内、著作・中島征雄

写真・三浦繁雄

写真・チヨイ書き・編集・印刷・製本・前北勝司

印刷・平成二十四年(2012)九月三十日